河内長野市遺跡調査会報Ⅱ

1990年3月

河内長野市遺跡調査会

序　　文

大阪府の南東部に位置する河内長野市は、高野街道に代表される和歌山や奈良へ向う街道の要衝として発達してきたまちです。

このため市内には数多くの文化財が残されています。

このような河内長野市も大阪への通勤圏に位置しているため住宅都市として近年、開発の波がおしよせてきています。

開発がもたらす文化財や自然に対する影響も大きいものがあります。特に、埋蔵文化財は開発と直接に結び付く大きな問題です。

遺跡に託されている河内長野の先人達のメッセージを現在の市民、更には未来の市民へ伝えてゆかなければなりません。

本書は発掘調査の成果を収録しています。先人達のメッセージの一部でも理解するための資料として活用していただければ幸いです。

これらの発掘調査に協力していただきました施主の方々の埋蔵文化財保護への深いご理解に末尾ながら謝意を表すものです。

平成２年３月

河内長野市遺跡調査会
理事長　中尾　謙二

例　　言

1，本書は平成元年度に河内長野市遺跡調査会が受託事業として実施した、市内２遺跡の発掘調査報告書である。

2，調査は、本市教育委員会社会教育課文化係尾谷雅彦を担当者として実施した。

3，調査にかかる事務は調査会事務局長植田兵武が主担した。

4，本書の執筆は遺構が尾谷雅彦、遺物を高田加容子・中村清美が行なった。

5，編集は尾谷が担当し、本書の文責は尾谷が負うものである。

6，発掘調査及び内業整理については下記の方々の協力を得た。

明地奈緒美・梶谷佳世・喜多順子・久保八重子・阪本桂子・中西和子・中野雅美・松尾寿美子・村上貴美

7，調査の実施に関しては下記の方々の協力を得た。

村蒔幸夫・東急不動産株式会社・島田組・写測エンジニアリング株式会社

8，本調査の記録はスライドフィルム等でも記録しており広く一般に活用されることを望むものである。

目　　次

序文
例言
はじめに…… 1

小塩遺跡（ＯＳＯ89－１）

１．位置と環境…… 4
２．調査に至る経過…… 4
３．調査の結果…… 4
４．まとめ…… 9

烏帽子形城（ＥＢＳ89－１）

１．位置と環境…… 10
２．調査に至る経過…… 10
３．調査の結果…… 11
４．まとめ…… 25

挿図目次

第１図　河内長野市遺跡分布図…… 2

小塩遺跡（ＯＳＯ89－１）

第２図　調査区遺構配置図…… 4
第３図　竪穴住居遺構実測図…… 5
第４図　掘立柱建物遺構実測図…… 6
第５図　各遺構出土遺物実測図…… 7
第６図　包含層出土遺物実測図…… 8

烏帽子形城（ＥＢＳ89－１）

第７図　調査区遺構配置図…… 10
第８図　掘立柱建物１遺構実測図…… 11
第９図　掘立柱建物２遺構実測図…… 12
第10図　掘立柱建物３遺構実測図…… 12
第11図　竪穴住居１遺構実測図…… 13

第12図　竪穴住居１出土遺物実測図…… 13
第13図　竪穴住居２埋土出土遺物実測図…… 13
第14図　竪穴住居２遺構実測図及び竈状遺構断面図…… 14
第15図　竪穴住居２出土遺物実測図…… 15
第16図　竪穴住居２出土鉄製品実測図…… 16
第17図　竪穴住居２出土石製品実測図…… 16
第18図　土坑１遺構実測図…… 17
第19図　土坑１出土遺物実測図…… 17
第20図　土坑２出土遺物実測図…… 17
第21図　土坑３出土遺物実測図…… 17
第22図　溝３遺物出土状況図(1)…… 18
第23図　溝３遺物出土状況図(2)…… 18
第24図　溝３出土遺物実測図…… 18
第25図　溝５出土遺物実測図…… 19
第26図　井戸遺構実測図…… 19
第27図　井戸出土遺物実測図…… 19
第28図　柵列遺構実測図…… 20
第29図　ピット出土遺物実測図…… 20
第30図　包含層出土石製品実測図…… 21
第31図　包含層出土遺物実測図…… 22

表　目　次

第１表　河内長野市遺跡地名表…… 3

図版目次

小塩遺跡（ＯＳＯ89―１）

図版１　遺構　遺跡全景（西から）、遺跡全景（東から）
図版２　遺構　竪穴住居、竪穴住居土器出土状況
図版３　遺構　竪穴住居・掘立柱建物、掘立柱建物
図版４　遺物　溝１（１・３・４・６・９・10）、溝２（７）、竪穴住居（２・11）、土器出土ピット（８）
図版５　遺物　包含層（12～18）

烏帽子形城（ＥＢＳ89—１）

図版６　遺構　遺跡全景（東から）、遺跡全景（西から）
図版７　遺構　掘立柱建物１、掘立柱建物３
図版８　遺構　竪穴住居１、竪穴住居１土器出土状況
図版９　遺構　竪穴住居２、竪穴住居２土器出土状況
図版10　遺構　竪穴住居２土器出土状況、竪穴住居２竈状遺構
図版11　遺構　土坑２、井戸
図版12　遺構　溝３、溝３土器出土状況
図版13　遺物　竪穴住居１（１～５）、竪穴住居２埋土（６）、竪穴住居２（７～13）
図版14　遺物　竪穴住居２（14～24）
図版15　遺物　竪穴住居２（25～28）、土坑１（29～37）、土坑２（38・39）
図版16　遺物　土坑３（40・41）、溝３（42～47）、溝５（48・49）、井戸（50～57）
図版17　遺物　井戸（58）、ピット（59～64）、包含層（65～70・83）
図版18　遺物　包含層（71～82）

はじめに

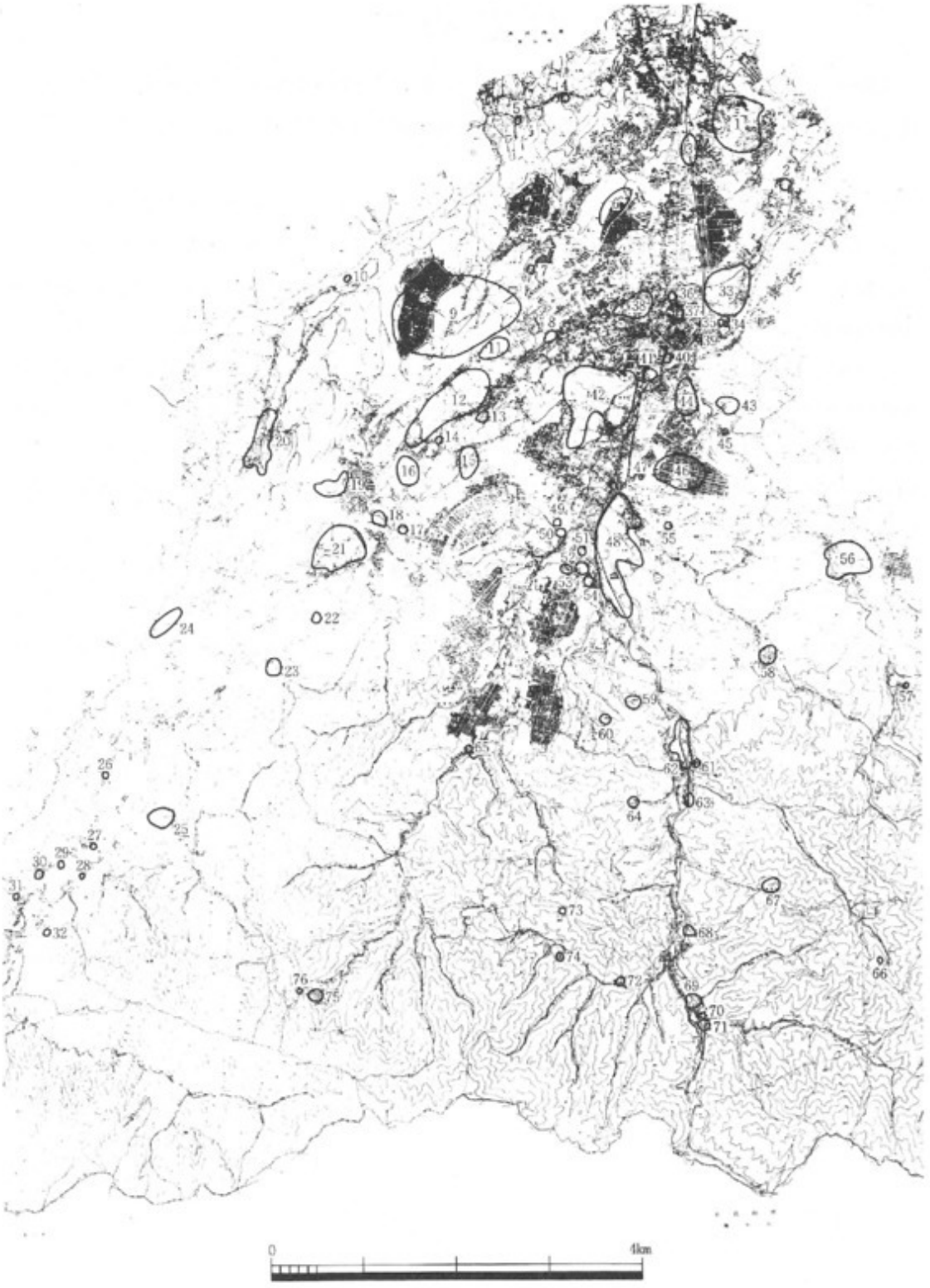
大阪府の東南端に位置する河内長野市は、南に位置する金剛・葛城山系から派生する山地性丘陵と山系に源を発する石川の支流によって形成された狭小な河谷と河岸段丘によって形成されている。

市域は旧河内国錦部郡に属し、紀伊・大和・和泉の三国と境を接する地域である。このため、石川の各支流によって形成された谷は各国に通じる街道が通り、古代から重要な交通の要所となり、数多くの文化財が残されている。また、市内の遺跡は丘陵尾根部に位置する古墳の一部及び中世の城塞を除き、各谷筋を望む山地性丘陵の斜面及び河岸段丘上に分布する。（第１図）

この河内長野市は、位置的には大阪市内から電車で30分という立地条件から早くから宅地開発が進められ近郊住宅都市として発達してきた町である。初期の開発は丘陵尾根部の開発が主であったが、近年は丘陵斜面および河岸段丘に開発が進み、開発件数が増加してきている。更に、住宅開発に伴う人口増加により、住宅都市としての道路アクセス・公共上下水道、さらには区画整理・住宅街区整備・公園整備など都市整備の充実が進められている。

このような状況下では、埋蔵文化財への影響は避けて通ることができない状況である。このため、市教育委員会は公共事業については、計画段階での埋蔵文化財の保存協議を進め、さらには事前の試掘調査を実施し、埋蔵文化財の把握に努めている。また、民間開発事業に関しては周知の遺跡以外でも500㎡以上の開発には試掘調査の協力を求め、実施している。

また、市教育委員会は、増加する発掘調査件数に対応するため、昭和63年11月１日に三日市遺跡発掘のため設立された三日市遺跡調査会を解散した後、新たに河内長野市遺跡調査会を設立した。当調査会は、公共事業および個人住宅に関する以外の民間開発に伴う発掘調査を実施するものである。



第１図　河内長野市遺跡分布図

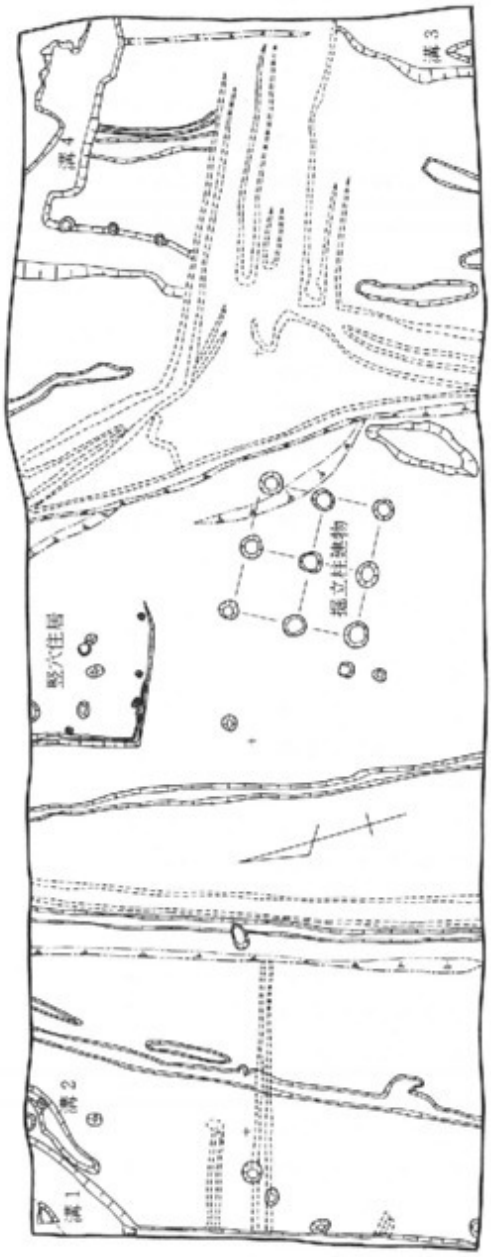
第1表　河内長野市遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	塩谷遺跡	弥生時代～中世	40	長野神社遺跡	中世
2	千代田神社遺跡	中世	41	大日寺遺跡	
3	菱子尻遺跡	縄文時代～中世	42	烏帽子形古墳	古墳時代
4	小山田1号古墳	奈良時代		烏帽子形城跡	縄文時代～中世
5	小山田2号古墳	奈良時代		烏帽子形八幡宮	中世
6	寺が池遺跡	旧石器時代～縄文時代	43	河合寺	中世
7	作吉元宮遺跡	中世	44	河合寺城跡	中世
8	上原北遺跡			末広窯跡	中世
9	長池窯跡群	中世	45	福田家	近世
10	青垣神社遺跡	中世	46	大師山遺跡	古墳時代前期～弥生時代中期
11	塚穴古墳・上原遺跡	古墳時代後期～中世	47	大師山南古墳	古墳時代
12	高向遺跡・高向南遺跡	弥生時代～中世	48	三日市遺跡・石仏遺跡	旧石器時代～近世
13	慈持寺跡	中世	49	小塩遺跡	古墳時代後期～奈良時代
14	高向神社遺跡	中世	50	加塩遺跡	古墳時代後期
15	宮山古墳	縄文時代～平安時代	51	尾崎遺跡北	〃
16	高木遺跡	旧石器時代～縄文時代	52	尾崎遺跡南	平安時代・中世
17	峰山城跡	中世	53	加賀田神社遺跡	中世
18	日の谷城跡	中世	54	ジョウノマエ遺跡	〃
19	仁王山城跡	中世	55	栗山遺跡	〃
20	金剛寺	平安時代～	56	観心寺	平安時代～
21	日野観音寺遺跡	中世	57	川上神社遺跡	中世
22	稲荷山城跡	中世	58	延命寺	
23	旗蔵城跡	中世	59	石仏城跡	中世
24	国見城跡	中世	60	左近城跡	中世
25	楠現城跡	中世	61	薬師寺	
26	清水阿弥陀堂跡	近世	62	清水遺跡	中世
27	滝畑埋墓	近世	63	千早口駅南遺跡	中世
28	中村阿弥陀堂跡	近世	64	地蔵寺	近世
29	堂村地蔵堂跡	近世	65	大江家	中世
30	天神社遺跡	中世	66	葛城第18経塚	中世
31	西の村阿弥陀堂跡	近世	67	旗尾城跡	中世
32	東の村観音堂跡	近世	68	天見駅北方遺跡	中世
33	向野遺跡	縄文時代～中世	69	蟹井淵北遺跡	中世
34	双子塚古墳伝承地	古墳時代	70	蟹井淵神社遺跡	中世
35	五の木古墳跡	古墳時代後期	71	蟹井淵南遺跡	中世
36	古野街遺跡	中世	72	流谷八幡神社遺跡	中世
37	脇所藩陣屋跡	近世	73	葛城第17経塚	
38	西代神社遺跡		74	薬師堂跡	中世
	本多藩陣屋跡	飛鳥・藤原時代・近世	75	岩湧寺	中世～
39	法師塚古墳伝承地	古墳時代	76	葛城第15経塚	

小塩遺跡（ＯＳＯ89―１）

１，位置と環境

当遺跡は、加賀田川を東側に見下ろす河岸段丘上の標高130mに位置する。この付近の微地形としては、北にのびる丘陵の東側斜面で南側には小谷が入り込んでいる。この小谷を挟んで６世紀の竪穴住居や掘立柱建物が検出された加塩遺跡が位置している。また、加賀田川の対岸には古墳時代から中世の複合遺跡である尾崎遺跡や中世のジョウノマエ遺跡が位置する。



第２図　調査区遺構配置図（1/200）

２，調査に至る経過

本調査は小塩町374番地にマンションが建設されることになり、原因者から市教育委員会に事前協議があり、市教育委員会は当該地が周知の遺跡、小塩遺跡の範囲に該当するため、遺構の存在が予想され、予備調査を実施した。結果、遺構・遺物が確認された。このため、埋蔵文化財についての取扱について協議がなされ、建物部分について記録保存を実施することになり、調査については河内長野市遺跡調査会が実施する事になった。平成元年６月25日に委託契約を締結し、平成元年７月５日から平成元年７月26日まで調査を実施した。

３，調査の結果

調査面積は約350㎡で調査地の東端と西端では約２ｍの比高差があった。遺構は中世の溝と古墳時代の竪穴住居・掘立柱建物・溝等が確認された。

層序

調査地が東端と西端で２ｍの比高差があり、更に３段の畑地に成っていたため、西端では耕土・床土（約20㎝）を除去するとすぐ地山の遺構面となる。しかし、東側ではにぶい橙色シルトや浅黄色シルトが堆積し、遺構面は現耕土面より約60㎝下となっていた。

遺構

中世

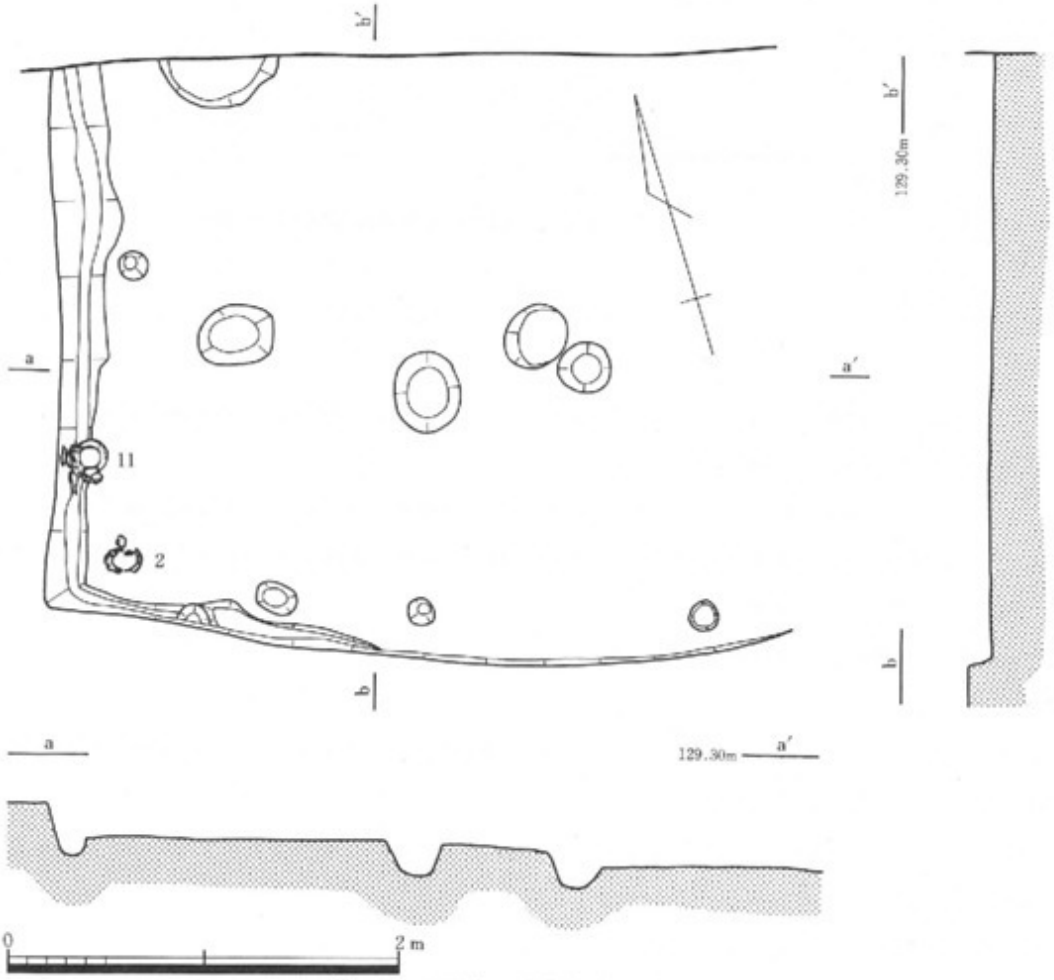
浅黄色シルトを埋土とする遺構がこの時期に該当する。検出された遺構は溝だけであった。溝は6条検出された。ほとんどは南北に走るもので、幅0.4m、深さ0.1mで溝内部からは瓦器椀の破片が出土している。

古墳時代

竪穴住居1・掘立柱建物1・溝4が検出された。

〈竪穴住居〉　調査区中央北側で検出された平面形が方形の住居である。北側は調査区外に広がり、東側は削平を受けている。主軸方向N—17°—E、東西辺の残存長4m、南北辺の検出長4m、西側壁の残存高0.18mを測る。壁際には幅0.15m、深さ0.1mの壁溝が巡っている。住居の中央部付近からは径30～40cm、深さ40cmのピットが5箇所、径15cm、深さ20cmのピットが壁際に沿って4箇所検出された。しかし、主柱穴を確定することはできなかった。

遺物は、住居の埋土からと西側壁溝から須恵器甕（11）、土師器甕（2）が出土している。

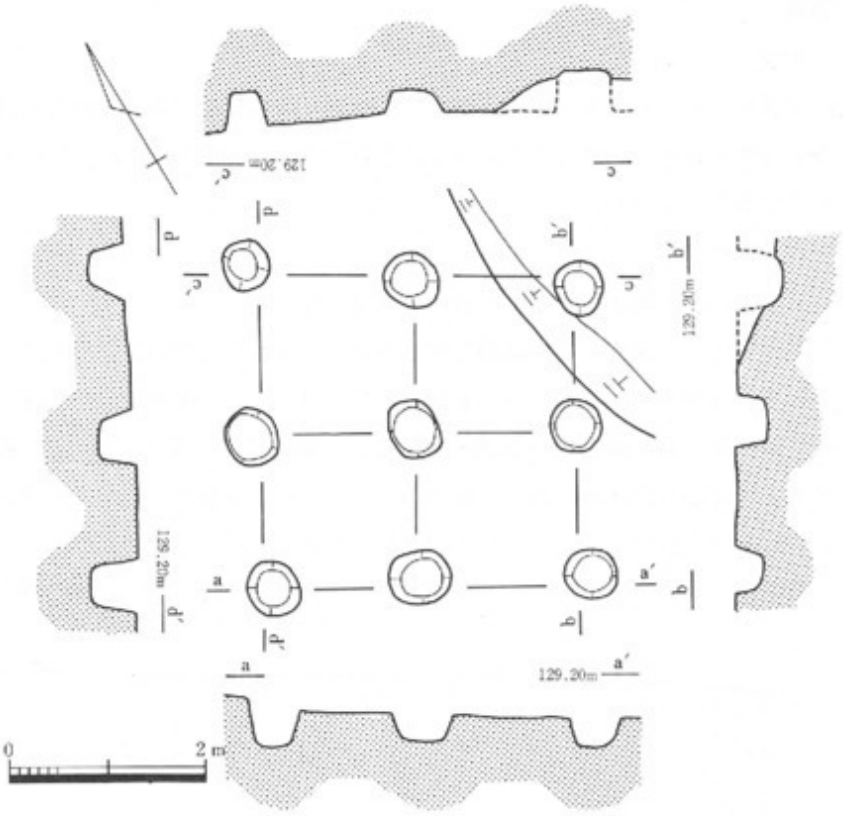


第3図　竪穴住居遺構実測図（1/40）

〈掘立柱建物〉　竪穴住居の南側1.5mに位置する。2間×2間の総柱の建物である。主軸方向N—28°—E、柱間は全て1.6mを測る。柱穴は径0.6m、深さ0.6mを測る。

この建物は柱の配置から倉庫の可能性が高い。

遺物は須恵器の細片が出土しているが、実測可能な遺物は出土していない。



第4図　掘立柱建物遺構実測図（1/80）

〈溝1〉　調査区の北西端で3m程度検出された幅0.4m、深さ1mの溝である。

溝埋土から須恵器の坏身（9・10）・坏蓋（6）、土師器坏（4）・甕（1・3）・把手（5）が出土している。

〈溝2〉　溝1の東側に接して検出された幅0.4m、深さ0.2m、検出長4mの溝である。

遺物は若干の須恵器と土師器の破片が出土している。

〈溝3〉　調査区の南東端で辛うじて肩部が検出された検出長4m、深さ0.5mの溝である。

〈溝4〉　調査区の北東側で検出された。平面が南北4.5m、東西6mのL形に屈曲する溝である。幅1.5m、深さ0.5mを測る。

遺物は若干の須恵器と土師器の破片が出土している。

遺物

遺物の相対的な出土量は少なく、時期的な分布は時期不明のサヌカイト片・古墳時代須恵器・土師器及び中世瓦器椀、青磁が出土した。

〈サヌカイト〉　包含層より4点出土している。内1点（18）は最大長4.8cm最大幅4.6cm最大厚0.65cmで周縁部に二次加工痕が認められる。

〈土師器〉　甕・坏・の他に高坏の破片等が出土している。

甕

溝1から出土している（1）は口径14.0cmで、口縁部は外上方に開き端部は丸い。体部にあまり張りを持たない形のものである。口縁部はヨコナデ、体部内面はヘラケズリを施す。（3）は半球形を呈する体部で、火を受けた痕が認められる。外面はハケ目調整、内面体部は指圧痕を残すが、底部はヘラケズリを施す。体部の最大径は12.6cmであるが、やはり口径のほうが上回るものと思われる。竪穴住居出土の（2）は口径15.4cmで、口縁部は外弯しながら上外方へ広がり、端部は上へつまみ上げておさめる。体部は張りを持ち最大径は口径を上回るものである。口縁部外面はヨコナデ、内面はヨコ方向のハケ目。体部外面はタテ方向のハケ目、内面はヘラケズリを施す。

坏

溝1出土の（4）は、口径18.6cmで、口縁端部は内傾する段を成す。内面は上部に平行線状の暗文、底部から放射状の暗文をそれぞれ有する。外面にも平行線状の暗文が認められる。

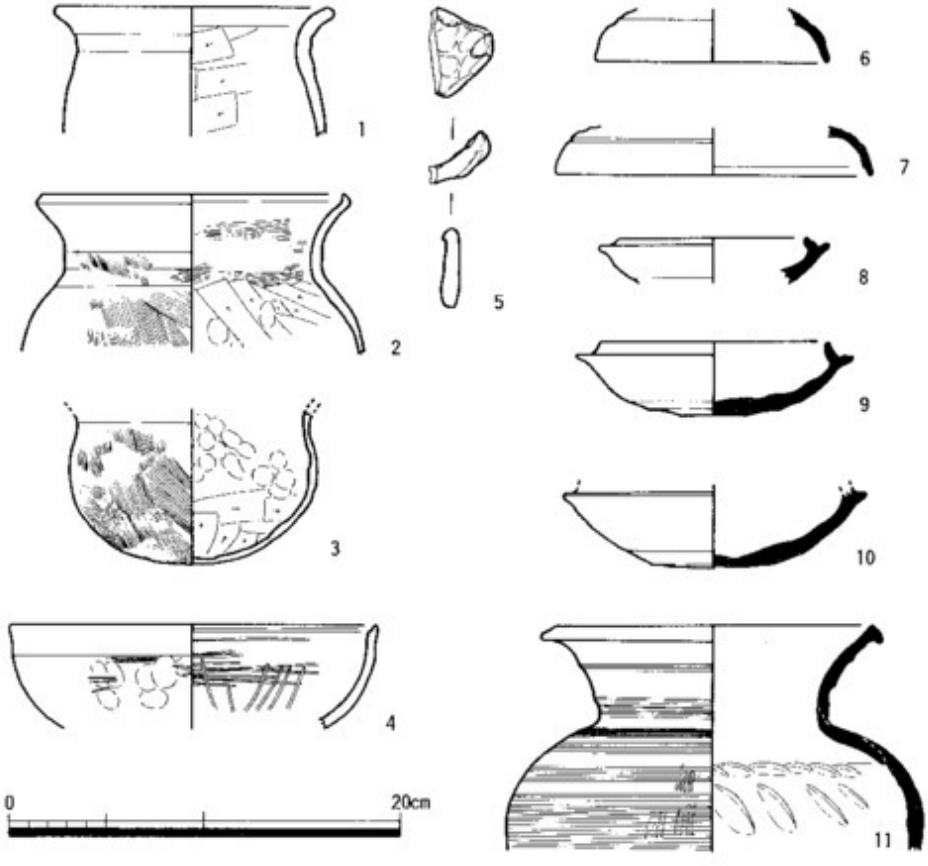
〈須恵器〉　蓋坏、高坏、甕を中心に、壺、甑等の破片が出土している。そのほとんどが古墳時代（陶邑編年II—4～5に相当）の物であるが、包含層からは小片で実測不可能ながら奈良時代（陶邑編年IV—1に相当）の蓋坏も出土している。

蓋坏

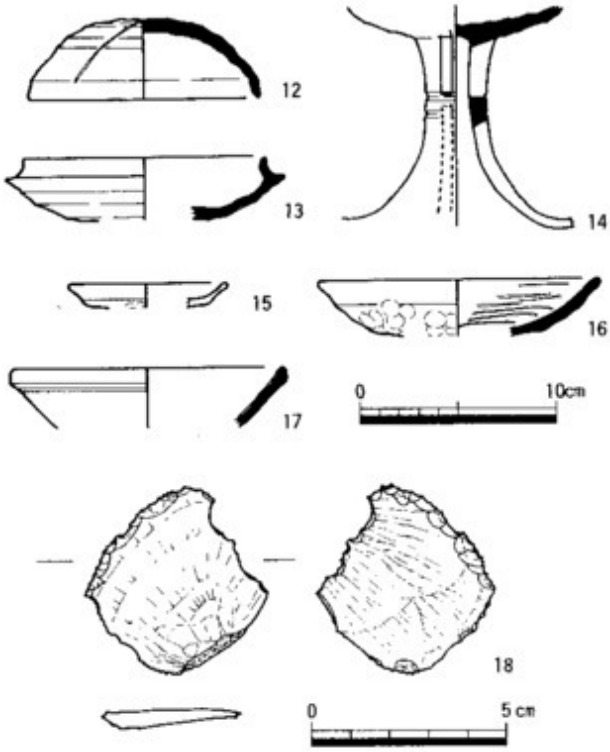
蓋坏はもっとも多く出土している器種で、全体で30個体ほどが確認されている。

蓋は溝2出土の（7）が天井部と口縁部の境に沈線を有し、口縁端部は内傾する段を成す形態のもので口径15.9cmを測る。陶邑編年II—3に相当するものである。

溝1出土の（6）は口径



第5図　各遺構出土遺物実測図



第６図　包含層出土遺物実測図

11.8cmで、口縁部と天井部の境は滑らかに屈曲し、端部は自然におさめる。天井部外面は回転ヘラケズリ調整を施す。包含層出土の（12）は口径11.8cm、器高4.2cmで、天井部から口縁部にかけてなだらかに下り、口縁端部は自然におさめる。天井部外面は回転ヘラケズリでヘラ記号を有する。これらは陶邑編年Ⅱ―４～５に相当するものである。

坏身は溝１、土器出土ピット、包含層からそれぞれ出土している。

溝１出土の（９）は口径11.4cm、受け部径14.0cm、器高3.8cm。立ち上がりは内傾して伸び端部は自然におさめる。受け部は水平で、端部は鋭い。外面は底体部の1/3を回転ヘラケズリ調整する。（10）も同様の形態で、受け部径15.2cmで、端部は丸い。底体部外面1/3を回転ヘラケズリ調整する。包含層出土の（13）は口径12.2cm、受け部径14.4cmで、底体部外面3/4を回転ヘラケズリ調整する。土器出土ピットの（８）は口径10.5cm、受け部径11.6cmとやや小さく、立ち上がりも短い。底体部外面下部を回転ヘラケズリ調整する。これらの身は陶邑編年Ⅱ－４～５に相当する。

高坏

実測可能なものは１点だけあった。包含層出土の（14）は脚部に２方向、２段の長方形の透かしを有するもので、上段と下段の間に２条の沈線を巡らす。

甕

竪穴住居より（11）が出土している。口径16.0cmで、頸部はやや長めで、外弯しながら上外方へ伸び、口縁部は下方へ屈折する。外面は頸部から肩部にかけカキ目調整を施し、内面は体部にアテ具の痕を残す。口縁部内面と肩部外面にはオリーブ灰色の自然釉が付着する。

また実測不可能であったが、溝１、２や包含層から外面に平行タタキ、内面に同心円状のアテ具痕を残す比較的大型のものと思われる甕の破片も多く出土しているが、個体数にすれば、６～７個程度である。

〈その他の土器〉　包含層出土の（15）は土師質の小皿で、口径8.0cmを測り、浅黄橙色を呈する。外面底部に指圧痕を残し、他はヨコナデ調整。

（16）は瓦器椀で、口径14.2cm、内面には平行線状のヘラミガキを施し、外面には指圧痕を残

す。

（17）は白磁の玉縁椀で、口径13.8㎝残存部には灰白色の釉がかかる。

4，まとめ

調査の結果、住居及び掘立柱建物、溝１～４は出土須恵器から陶邑編年Ⅱ―４～５の時期に相当する。実年代では６世紀後半代と考えられる。また、瓦器を出土する溝も検出されている。

小塩遺跡は昨年度の調査で８世紀代の遺構・遺物が検出されており、当遺跡が古墳時代後期、奈良時代、中世の複合遺跡であることが予想される。

烏帽子形城（ＥＢＳ89−１）

１，位置と環境

当該調査区は本市喜多町170番地、国道317号線の東側に位置する。当遺跡は中世の烏帽子形城を中心に天見川西側河岸段上、石川の南側段丘上に広がる遺跡である。烏帽子形城は南北朝時代に楠木正成によって築城されたと伝えられる城郭であるが、文献記録からは15世紀から17世紀初頭に登場する。

第７図　調査区遺構配置図

この城山の南東側山裾には烏帽子形八幡神社や神宮寺の高福寺跡があり、段丘平坦面には城施設が分布していると予想される。また、城の東北側に伸びる尾根上には後期の円墳と考えられる烏帽子形古墳が位置する。城の主郭は標高182ｍ、今回の調査地区の標高120ｍを測る。

２，調査に至る経過

本調査は当該地にマンションが建設されることになり、原因者から市教育委員会に事前協議があり、市教育委員会は当該地が周知の遺跡烏帽子形城の範囲に該

当するため、遺構の存在が予想され、予備調査を実施した。結果、遺構・遺物が確認された。このため、埋蔵文化財についての取扱について協議がなされ、建物部分について記録保存を実施することになり、調査については河内長野市遺跡調査会が実施する事になった。平成元年８月22日に委託契約を締結し、平成元年８月23日から平成元年９月９日まで調査を実施した。

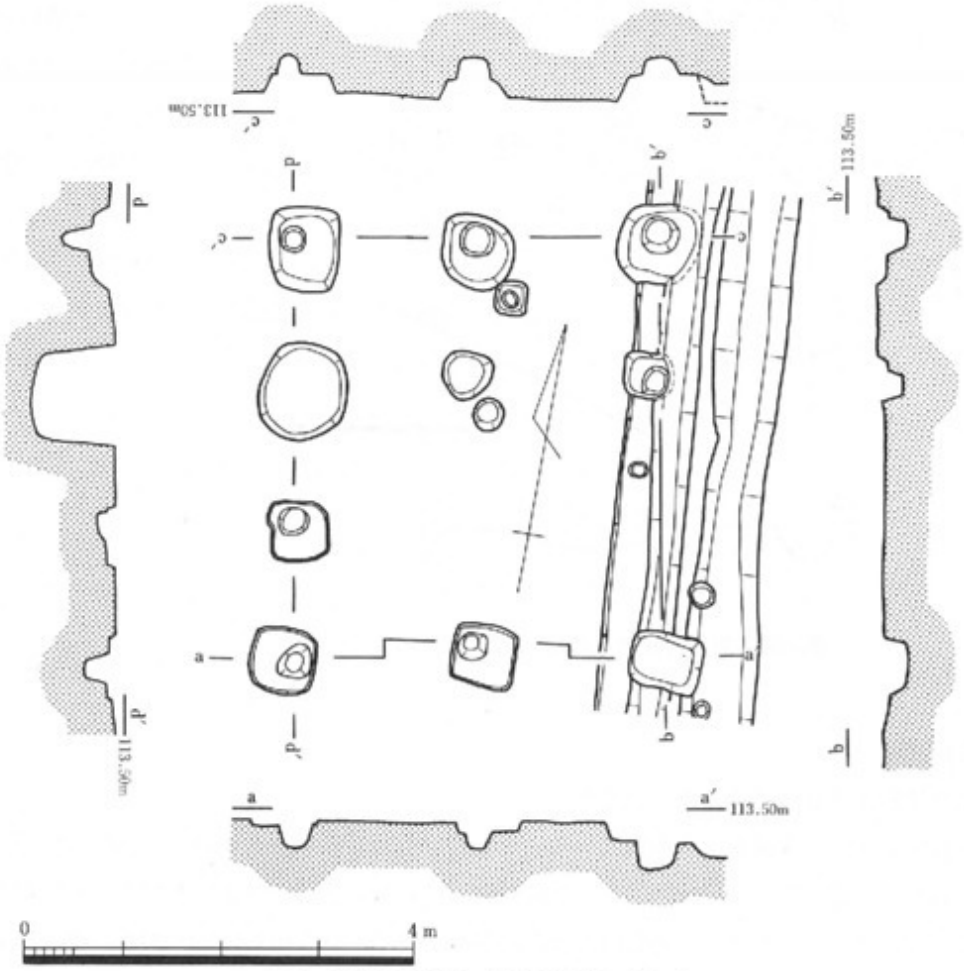
３，調査の結果

調査地は建物部分のＡ調査区300㎡とタンク埋設部分のＢ調査区70㎡とに分割した。調査の結果、Ａ調査区からは奈良時代の掘立柱建物、古墳時代の竪穴住居・掘立柱建物が検出された。

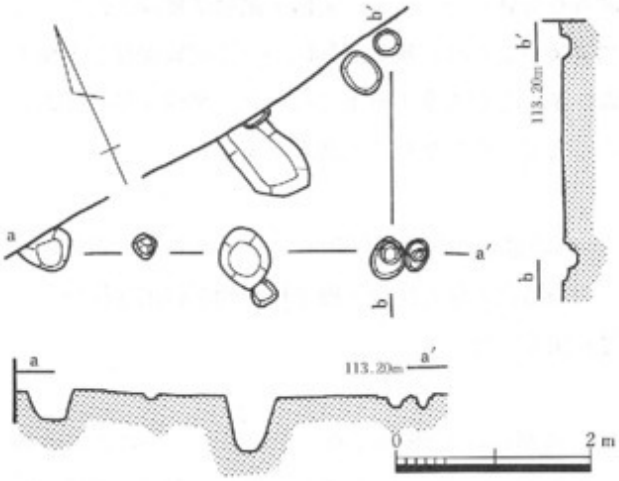
また、遺物は縄文土器・須恵器・土師器等が出土した。

層序

Ａ調査区は現況が東西２段の畑地からなり、東側は約0.4m低くなっている。このため、西側畑地は耕土・床土（約30㎝）を除去するとす褐黄色シルト（10㎝）そして地山となる。遺構面は平坦な地山面である。東側畑地は遺構面となる地山が西から東に約30㎝比高差をもって傾斜する面となる。このため、西側端は耕土・床土（約30㎝）を除去すると地山となる。しかし、東側端



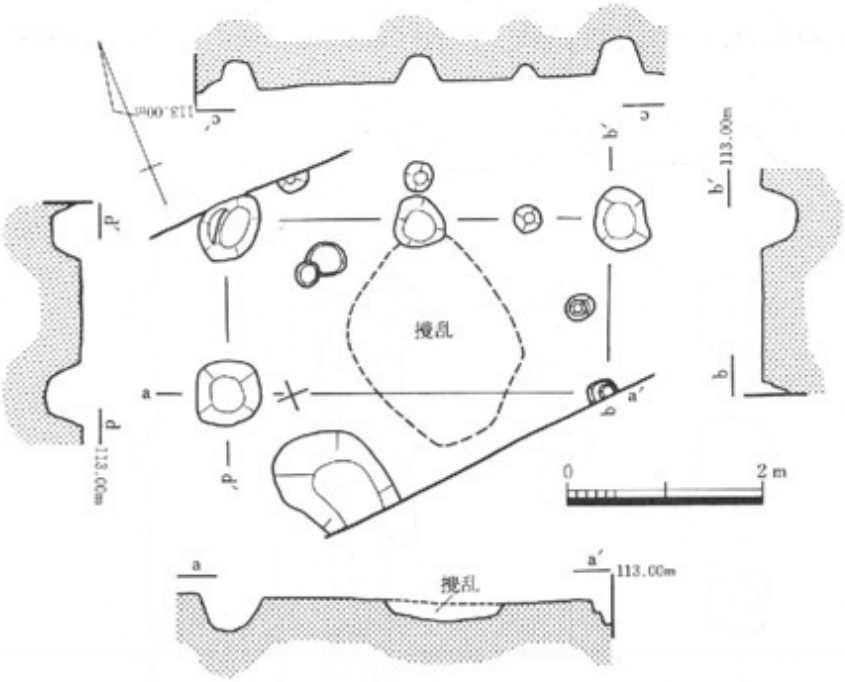
第８図　掘立柱建物１遺構実測図（1/80）



第９図　掘立柱建物２遺構実測図（1/80）

になると耕土・床土（約30cm）、暗灰黄色シルト（約５cm）、灰黄色シルト混じりレキ（約５cm）、黄褐色レキ混じり粘土（約20cm）、地山となり、遺構の埋土は黄灰色レキ混じりシルトが主である。

Ｂ調査区も西端から東端へ地山が約40cmの比高差をもって傾斜している。このため、西端では耕土・床土（約30cm）を除去すると灰黄色レキ混じりシルト（約10cm）、そして、古墳時代包含層と思われる黄灰色レキ混じりシルト（約３cm）、地山となる。東側では耕土・床土（約30cm）と古墳時代包含層と思われる黄灰色レキ混じりシルト（約15cm）の間に黄色レキ混じりシルト（約10cm）、黄色レキ混じりシルト（約15cm）が挟在している。



第10図　掘立柱建物３遺構実測図（1/80）

遺構

掘立柱建物

掘立柱建物は３棟復元することができた。

〈掘立柱建物１〉　Ａ調査区の西側部分で検出された。桁行き３間（4.2m）×梁行き２間（3.8m）の建物で主軸方向はN—50°—E、柱間は桁行き1.4m、梁行き1.9mを測る。柱穴掘方は方形を呈しているものが多く、一辺0.6m、深さ0.6mを測る。柱穴の径約20～30cm。梁行き北側１間目中央にも柱穴を有しているようである。

遺物は掘方及び柱穴から土師器細片が出土しているが実測可能なものはなかった。

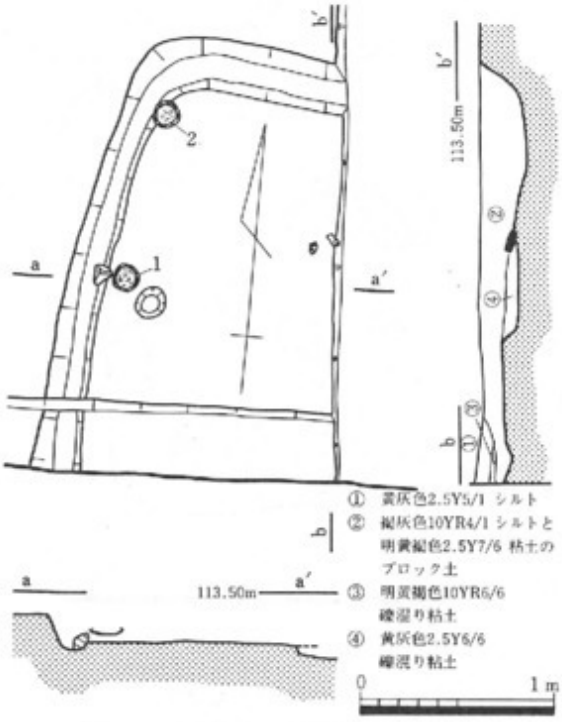
〈掘立柱建物２〉　Ａ調査区の東側部分で検出された。桁行き２間（２ｍ）以上×梁行き１間（1.5m）以上の建物で主軸方向はＮ―50°―Ｅ、柱間は桁行き１ｍ、梁行き1.5mを測る。柱穴の径約20～30㎝、深さ15㎝を測る。

遺物は出土していない。

〈掘立柱建物３〉　Ｂ調査区の中央部で検出され平面形長方形を呈する。桁行き２間（４ｍ）×梁行き１間（1.8m）の建物で主軸方向はＮ―50°―Ｅ、柱間は桁行き２ｍ、梁行き1.8mを測る。柱穴の径約70㎝、深さ40㎝を測る。

遺物は出土していない。

竪穴住居

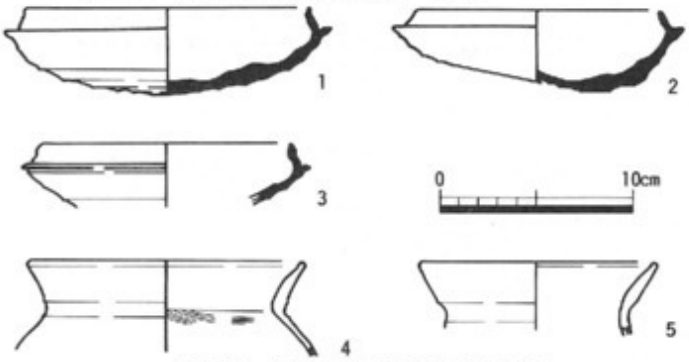


第11図　竪穴住居１遺構実測図（1/40）

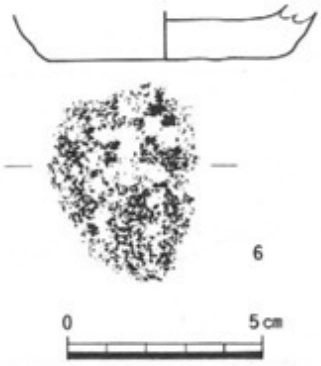
〈竪穴住居１〉　中央南側から４分の一程度検出された平面形が方形の住居である。南側は調査区外、東側４分の一は畑造成時に削平を受けていた。主軸方向はＮ―50°―Ｅで、西側の検出長2.4m、北側辺の残存長１ｍ、残存壁高0.2mで幅0.25m・深さ0.25mの壁溝が巡っている。また、西側辺近くにピットが検出された。

遺物は床面から須恵器坏身（１～３）、土師器甕口縁（４・５）が出土している。

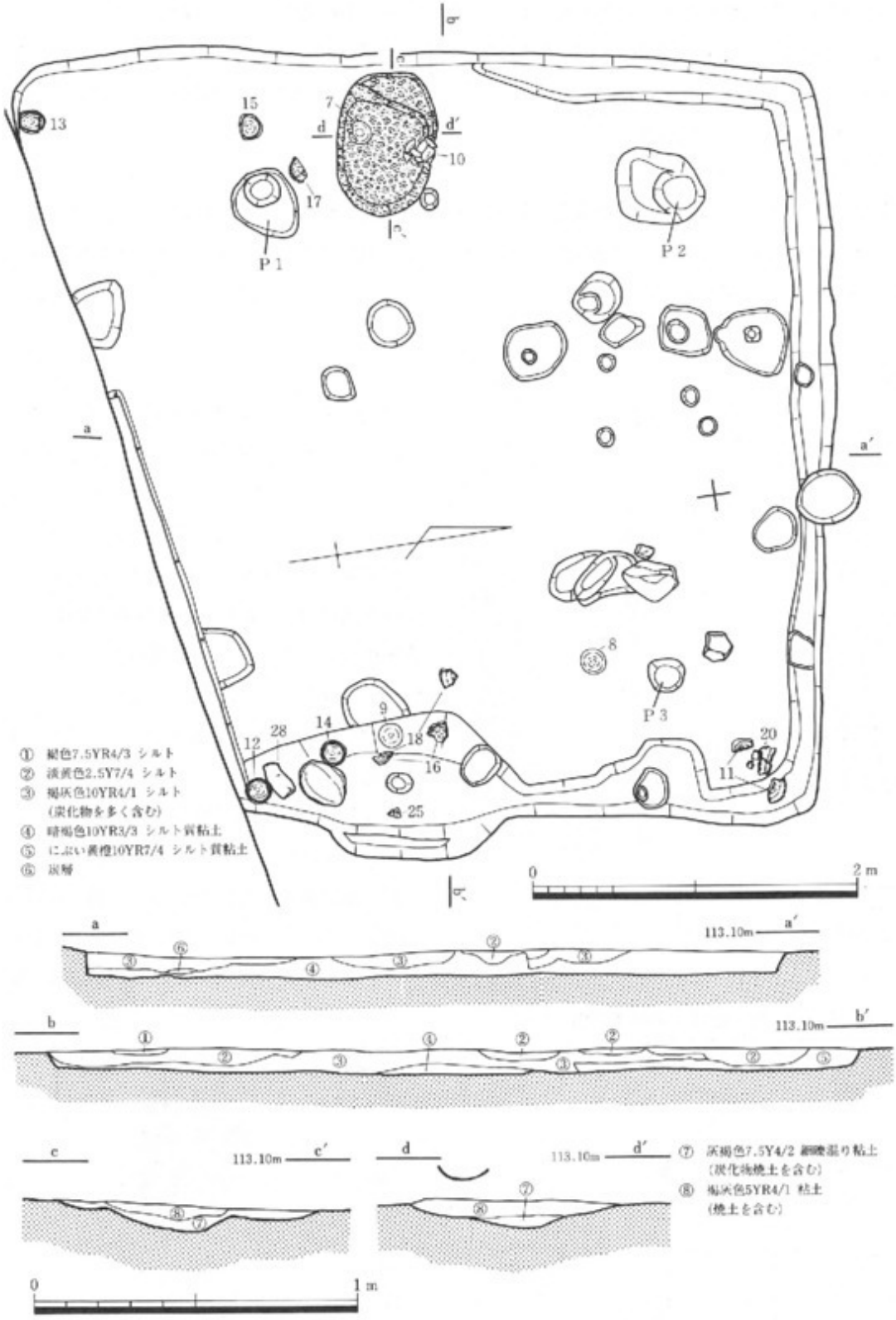
〈竪穴住居２〉　竪穴住居１の東側7.5mに位置し、平面形が方形を呈する住居である。南側一部は調査区外に伸びる。主軸方向はＮ―50°―Ｅで、一辺長4.7m、残存壁高0.1m、西辺から北、東辺に壁溝が巡る。壁溝は幅



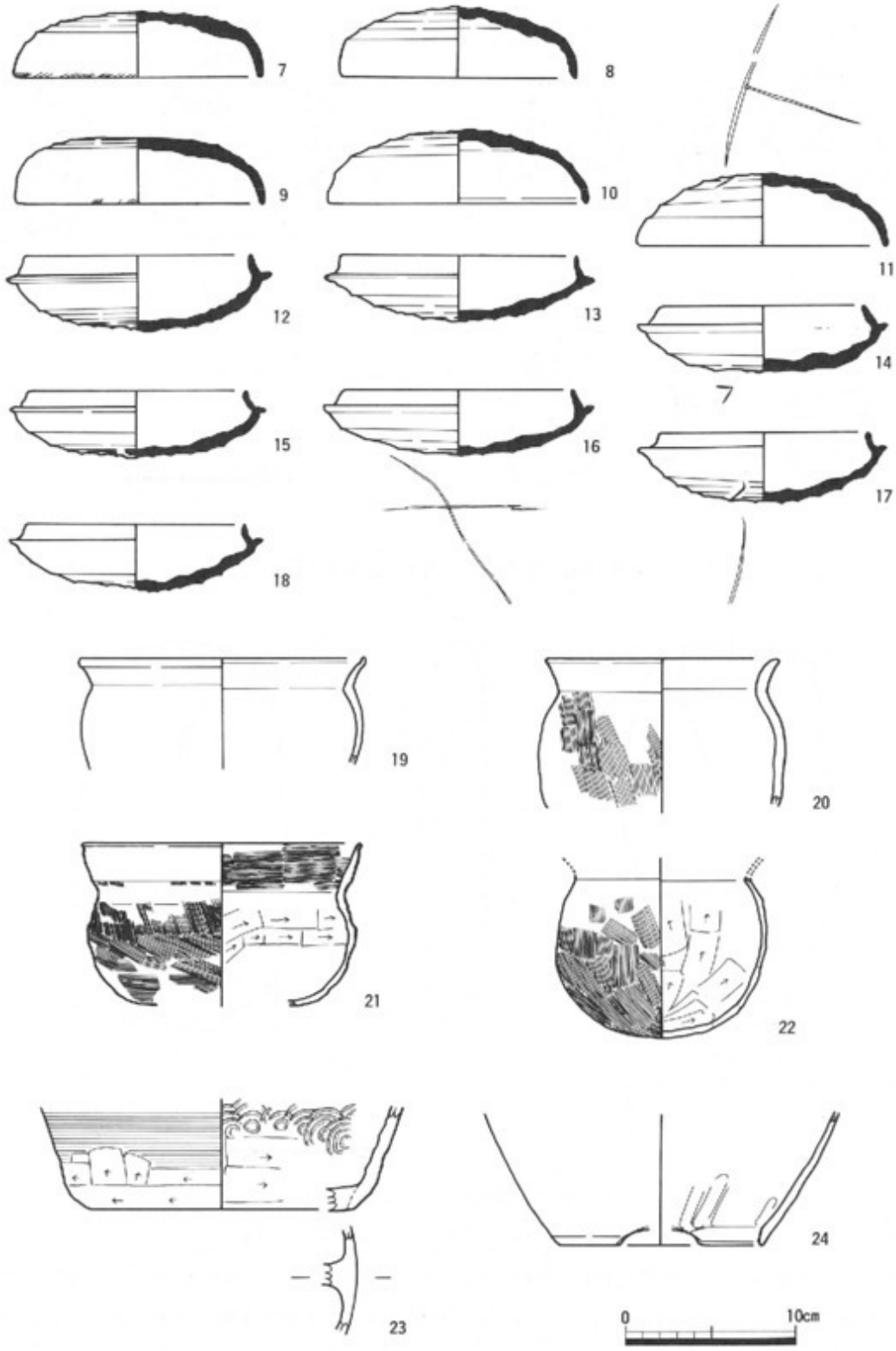
第12図　竪穴住居１出土遺物実測図



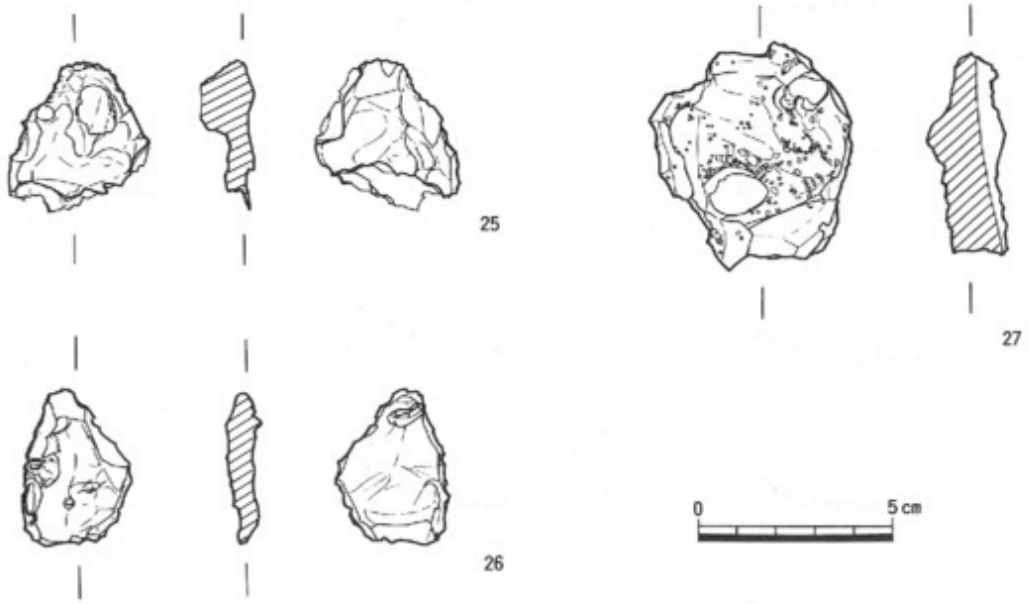
第13図　竪穴住居２埋土出土遺物実測図



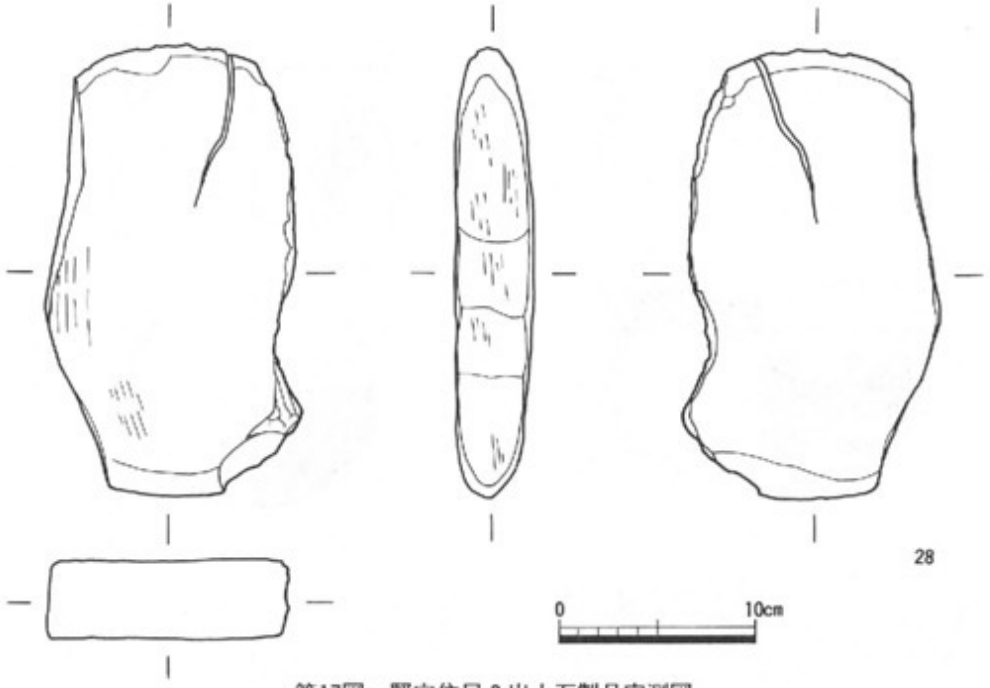
第14図　竪穴住居２遺構実測図及び竈状遺構断面図



第15図　竪穴住居２出土遺物実測図



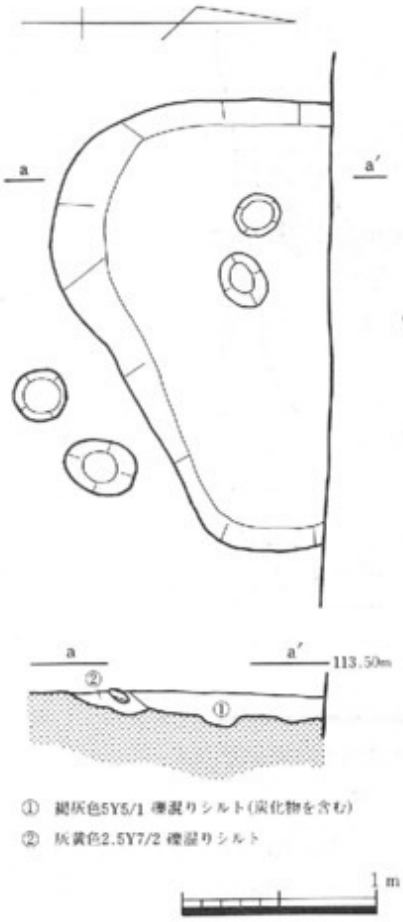
第16図　竪穴住居２出土鉄製品実測図



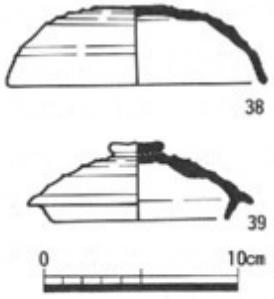
第17図　竪穴住居２出土石製品実測図

0.2m、深さ５㎝を測る。東辺の壁溝は幅を0.9mに広げ須恵器と鉄器が出土している。また、西辺中央には長径0.87m×短径0.6mの範囲で焼土が広がり、深さ約５㎝程度の土坑状を成しカマドの可能性がある。また、住居内にはピットが多く検出され、主柱穴を断定することはできなかったが、Ｐ１～Ｐ３のピットは深さが30㎝以上有り主柱穴の可能性がある。

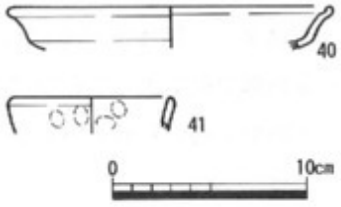
遺物は住居の埋土からと、カマド状遺構周辺と東側壁溝の部分から一括出土している。



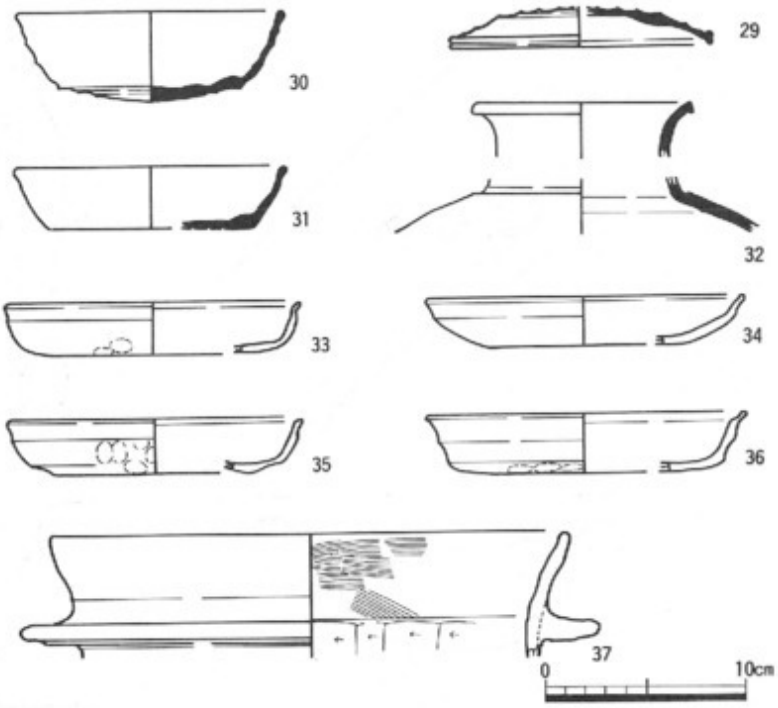
第18図　土坑１遺構実測図



第20図　土坑２出土遺物実測図



第21図　土坑３出土遺物実測図



第19図　土坑１出土遺物実測図

須恵器は坏蓋（７～11）・坏身（12～18）、土師器鉢（19・21）・甕（20・22）・甑（23・24）が出土している。その他の遺物としては、鉄製不明品（25・26）と鉄さい（27）、砥石（28）が出土している。また、埋土から縄文土器の底部（６）が出土している。

土坑

遺物を出土した土坑はＡ調査区の３箇所である。

〈土坑１〉　掘立柱建物１の北側2.5mに位置する。北側が調査区外に広がる、平面形方形と推定される土坑である。検出幅2.4m、深さ0.1m、南側辺はＮ－50°－Ｗに偏する。

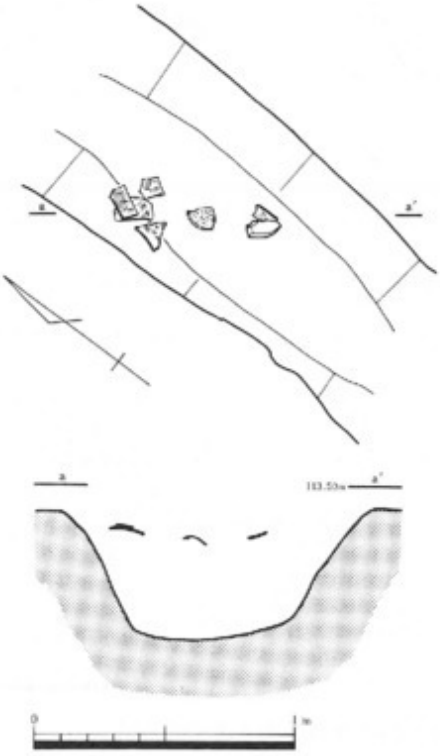
遺物は須恵器坏身（30・31）・坏蓋（29）・壺口縁（32）、土師器坏（33～36）・土釜（37）が出土している。

〈土坑２〉　掘立柱建物２の東１mに位置する。平面形は不定形である。南北軸2.2m、東西軸２m、深さ0.15mを測る。

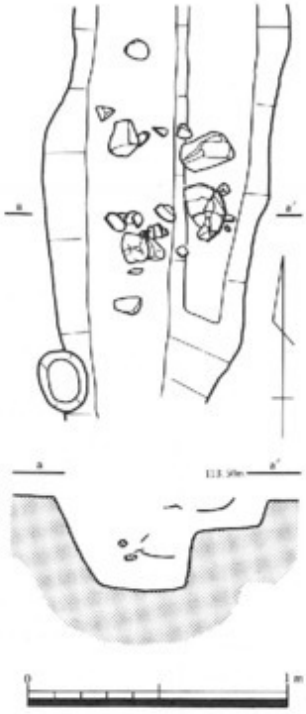
遺物は須恵器坏蓋（38）・脚付長頸壺蓋（39）が出土している。

〈土坑３〉　掘立柱建物２の北４mに位置する。平面形は不定形である。長軸2.2m、短軸２m、深さ0.15mを測る。

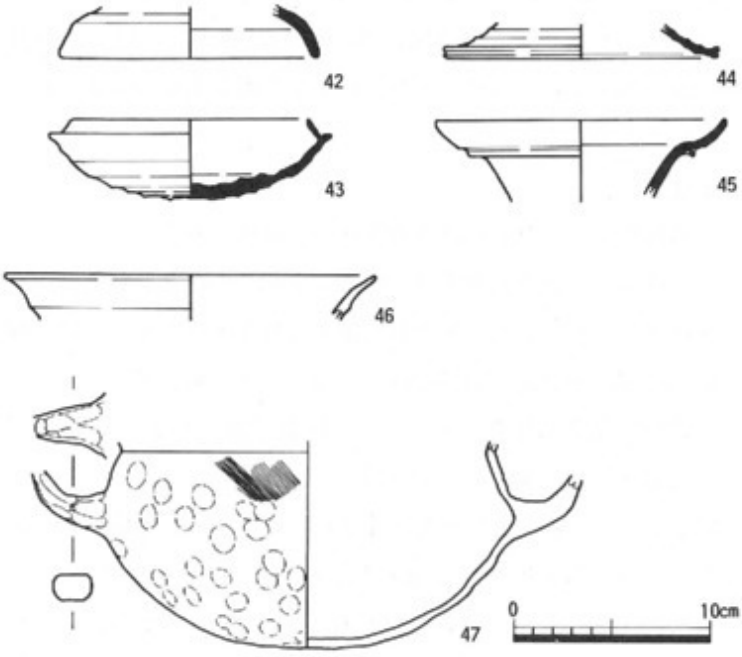
遺物は土師器皿（40）・製塩土器（41）が出土している。



第22図　溝３遺物出土状況図（１）



第23図　溝３遺物出土状況図（２）



第24図　溝３出土遺物実測図

幅0.7m、深さ0.1mを測る。

遺物は瓦器片・須恵器片・土師器片が出土している。

溝

Ａ調査区の西側半分に集中して６条検出された。

〈溝１〉　Ａ調査区の西側から南側辺に沿って検出した。平面形はＬ形に巡る。幅は0.6m以上、深さは0.25mを測る。調査区の西側には接近して方向が同一の現存の溝が流れており、この溝と重複するようである。

遺物は瓦器椀片・須恵器片・土師器片が出土している。

〈溝２〉　溝１より東に1.5m内側で検出されたもので、平面形も同じＬ形を呈する。

〈溝３〉　掘立柱建物１の西２ｍで、東約10度振りながら調査区を横断する溝である。断面形凵字形を呈し幅0.6m、深さ１ｍを測る。

遺物は須恵器坏蓋（42）・坏身（43）・高坏脚部（44）・甕（45）、土師器甕口縁（46）、把手付鍋（47）などが出土している。

第25図　溝５出土遺物実測図

〈溝４〉　調査区の中央部を溝５と平行して南北に横断する溝である。幅0.6m、深さ0.1m、を測る。

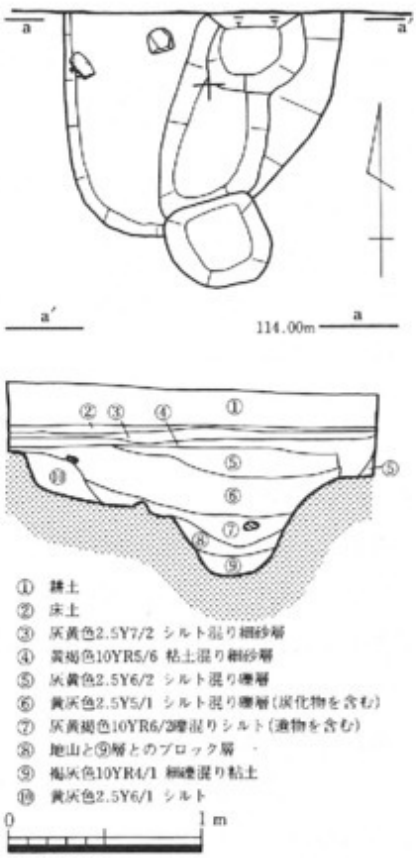
遺物は出土していない。

〈溝５〉　調査区の中央部を溝４と平行して南北に横断する溝である。幅0.7m、深さ0.1mを測る。

遺物は土師器小皿（48）、唐津焼鉢（49）が出土している。

〈溝６〉　調査区の中央部、溝５の東側1.5mを平行して南北に横断する溝である。幅0.5m、深さ0.1mを測る。

遺物は出土していない。

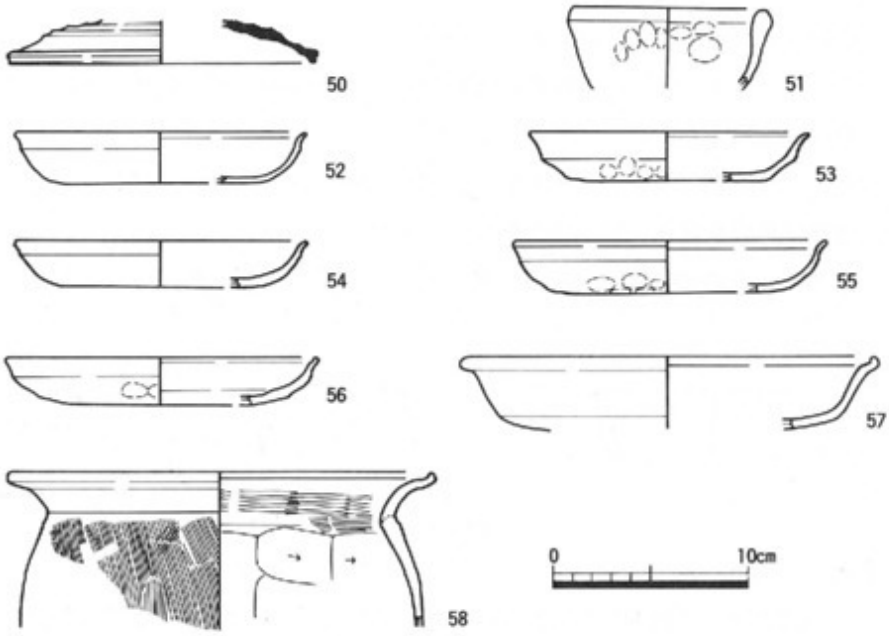


第26図　井戸遺構実測図

井戸

井戸と考えられる遺構がＡ調査区で１基検出された。

〈井戸〉　土坑１の西側に接近して検出された。平面形は楕円形で北半分は調査区外に広がる。上端東西径1.6m、南北検出径1.3m、下端径0.5m、深さ0.6m



第27図　井戸出土遺物実測図

を測る。断面は２段の堀方となっている。

遺物は須恵器坏蓋（50）、土師器坏（52～57）・甕（58）・製塩土器（51）が出土している。

柵列

Ａ調査区の中央で検出された。

〈柵列〉　溝４と溝６とに挟まれた状態で南北に検出された。４間分で検出長6.5m、柱間は１．５ｍを測る。

遺物は検出していない。

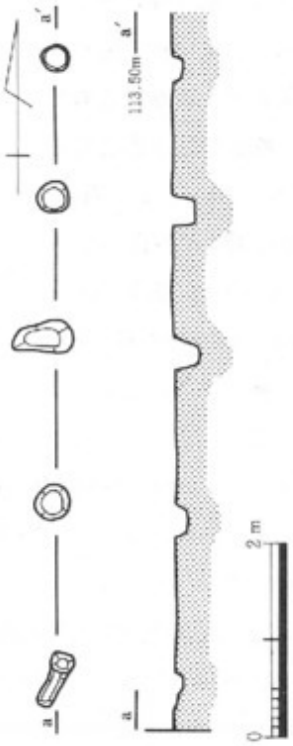
遺物出土ピット

〈Ｐ１〉　掘立柱建物の柱穴に接して検出された。径0.2m、深さ0.3mの円形のピットである。

遺物は土師器皿（59）が出土している。

〈Ｐ２〉　竪穴住居２の東側に接して位置する。一辺0.4m、深さ0.5m方形のピットで、柱穴の可能性が高いが建物に復元できる他の柱穴が検出されていない。

遺物は土師器皿（60）が出土している。



第28図　柵列遺構実測図

〈Ｐ３〉　竪穴住居の北２ｍに位置する。径0.3m、深さ0.4ｍの円形のピットである。

遺物は土師器坏（61）が出土している。

〈Ｐ４〉　掘立柱建物の東側に接して位置する。径0.3m、深さ0.5mの円形のピットである。

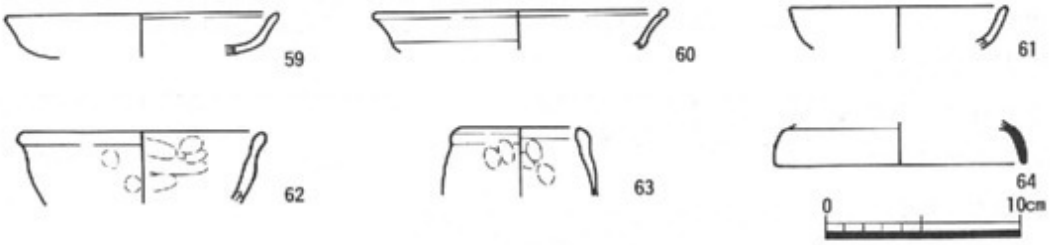
遺物は製塩土器（62）が出土している。

〈Ｐ５〉　Ｐ４に切られた状態で検出された。径0.3m、深さ0.5mの円形のピットである。

遺物は製塩土器（63）が出土している。

〈Ｐ６〉　調査区の東側で検出された、径0.2m、深さ0.5mの円形のピットである。

遺物は須恵器坏蓋（64）が出土している。



第29図　ピット出土遺物実測図

遺物

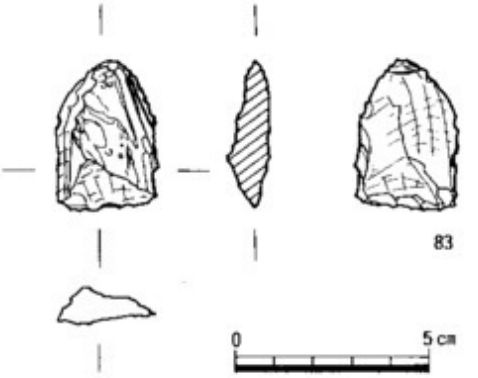
この調査区より出土した遺物は、おおよそ５割が土師器、４割が須恵器で、その他の遺物として縄文土器、中近世の土器及び石製品、鉄製品などが出土している。

縄文時代

竪穴住居２、土坑２の埋土中及び包含層から45片の縄文土器か出土した。大半は細片で、磨滅が著しい為、形態は不明である。

（65・66）は厚さが0.7㎝を測る粗製土器片である。（６・67）は平底を示す鉢底部である。いずれも磨滅が著しく調整は不明であるが、縄文後期のものと思われる。

〈石製品〉　包含層から剥片（83）が出土した。一部分に自然面を残し、周縁部を刃部として使用した可能性がある。



第30図　包含層出土石製品実測図

古墳時代後期

〈須恵器〉　坏蓋、坏身、高坏、甕、甕などの各種類が出土している。甕は小片が多く実測可能なものは無かった。

坏蓋

天井部と口縁部の間の稜が消え、全体にやや丸くなだらかなカーブを描くもの（８・10・11・38）と天井部が平でやや扁平な感じを与えるもの（７・９・42・64・68）がみられる。（11）は天井部にヘラ記号を有する。（７・９）は口縁部外面にキザミ目が巡る。

坏身

坏身（１～３・12～18・43・69）は立ち上がり部が短く内傾気味に伸び器高は低く、ヘラ削りの範囲は狭い。底部の安定性に欠くものが多く、歪み変形しているもの（２・13・15・18・69）もある。この他（４・16・17）の底部にヘラ記号がみられる。

高坏

（44）は下外方へ下り、裾部でさらに外下方に広がり、端部に浅い凹を成す高坏脚底部である。この外、多方向にスカシを持つと思われる脚部なども出土している。

甕

（45）は口縁部上半に突線を巡らせた後、ラッパ状に上外方へ内弯しながら伸びる甕口縁部である。この外、体部に刺突文帯を有する体部片もみられた。

壺蓋

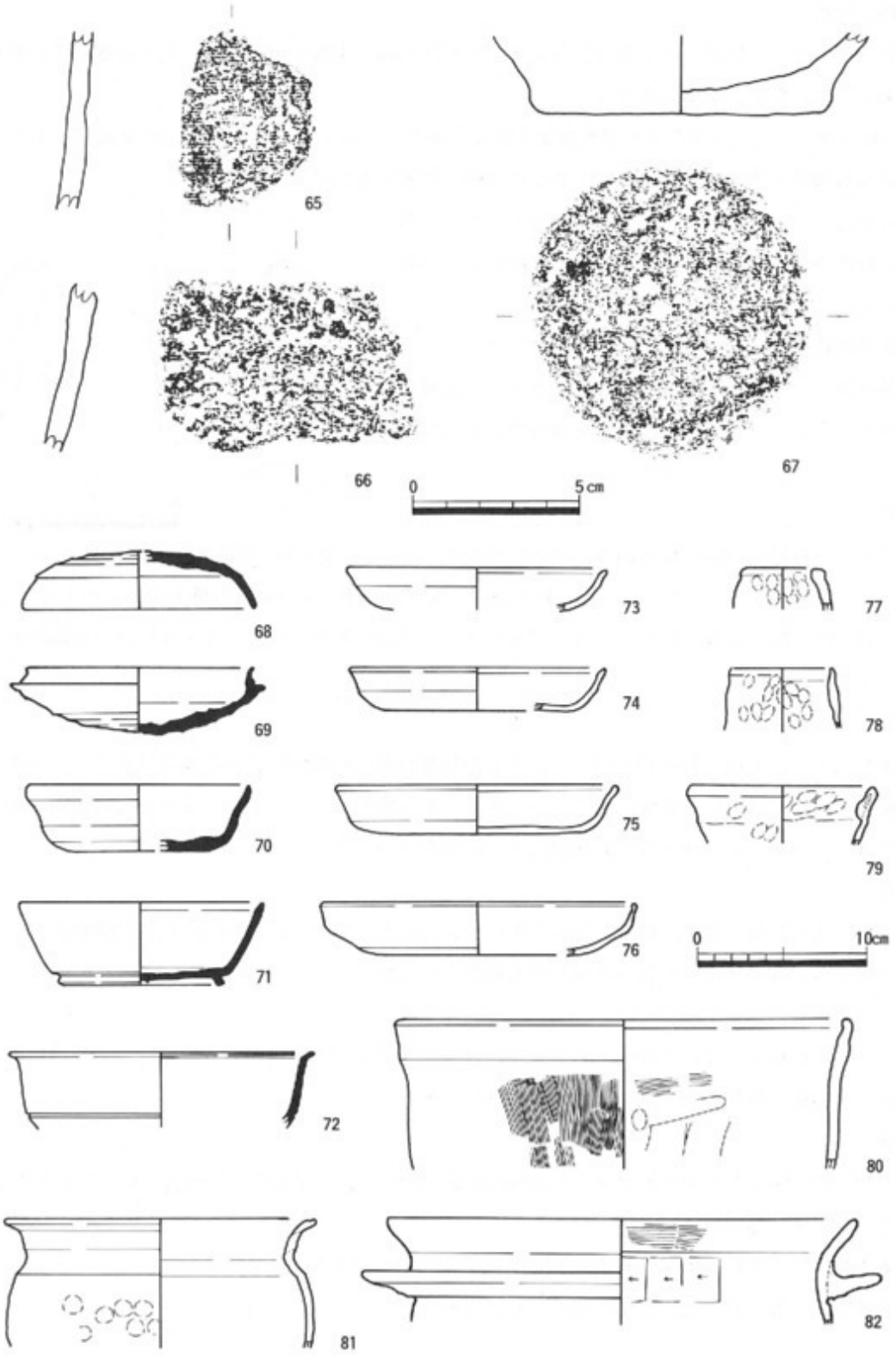
（39）は丸味をもつ天井部中央に上面凹状の摘みを有し、内面端部に内傾するかえりを有する。かえりで接地し端部は鋭い。

須恵器は、いずれも陶邑編年でⅡ－４～Ⅱ－５に相当するものと考えられる。

〈土師器〉　甕、鉢、甑、把手付鍋などが出土している。

甕

（４・５）は口径が20㎝未満と小さく「く」の字形に短く外曲する口縁部を持ち端部をやや内



第31図　包含層出土遺物実測図

側に丸く肥厚するタイプである。（20）は口縁部を肥厚して上外方へ伸びるもので、端部を舌状に納め体部外面にハケ目を施す。（22）は口縁部を欠くが、やや丸い体部から頸部が「く」の字形に屈曲するもので、体部外面にハケ目、内面にヘラ削りを施す。（46）は体部を欠くが、口縁部が上外方へ伸びた後外反するものである。

鉢

（19・21）は口径が20㎝以下のやや小型の鉢で、口縁部は外曲して上外方に伸び、体部は中位で最大径と成るが、口径と同じ位か又は口径よりやや小さい。（19）は調整不明。（21）は体部外面と口縁部内面にハケ目、体部外面にヘラ削りを施す。

甑

（23・24）は上半部を欠く甑底部である。（23）は外面にカキ目を施し、内面に押し型文の痕が残る平底のもの。全体に淡黄色で須恵器技法の土師器であると思われるが、須恵器の生焼けの可能性もある。（24）は底部から体部が外上方へ立ち上がるもので、（23）同様おそらく楕円形の穴孔を複数持つと思われる。（80）は復元口径26.4㎝を測る甑の口縁部で、体部外面及び内面口縁部付近にハケ目、内面体部にヘラ削りを施す。

把手付鍋

（47）は口縁部を欠く把手付鍋である。やや扁平の丸い体部で、最大径を成す位置に舌状の把手を有する。残存する把手は一方向であるが、おそらく二方向に付くと思われる。

〈鉄製品〉　竪穴住居２より鉄製品３片出土している。いずれも錆が付着し原形を留めず、詳細は不明である。（25・26）はおそらく同一のものと思われる。（27）は表面に気泡が多くみられる鉄さいである。

〈石製品〉　竪穴住居２より砥石（28）が出土した。両表面、側面の一方向に使用痕が認められた。

奈良・平安時代

〈須恵器〉坏蓋、坏身、壺などの器種が出土している。

坏蓋

（29・50）は天井部中央に擬宝珠様摘みを付す形式のもので、蓋の内側にみられるかえりが消失したもの。いずれも摘み部を欠くが、天井部にややふくらみがみられる程度の器高を有する。陶邑編年ではⅣ－１に相当すると考えられる。

坏身

平底のもの（30・31・70）と、高台を伴うもの（71）がある。（30）は底部がやや丸みを持つ。（70）は口縁部がＳ字状に伸びる形態を示すが、いずれも陶邑編年ではⅢ－２～Ⅳ－１に相当すると考えられる。（71）はしっかりしたハの字形の高台が底端部に付くことから、Ⅳ－２～Ⅳ－３に相当すると思われる。（72）は口縁端部を強く外反させる坏であると思われる。口縁端部内面に細かい回転ヘラ削りが施され、外体部に一条の沈線が巡る。

壺

(32) は接合部はないがおそらく同一のものと思われる長頸壺の口縁部と肩部である。口縁部は上外方に伸び、端部付近で外反し外傾する面を成す。肩部は頸部より屈曲して下外方へ下がる。

〈土師器〉　坏、皿、甕、土釜などが出土している。

坏

底部から内弯気味に立ち上がり、口縁部で外反し端部を内側へ巻き込み丸く納めるもの（坏Ⅰ）口縁端部を巻き込まず内傾する面を成するの（坏Ⅱ）に分けられる。坏Ⅰには口径14.5～16㎝、器高2.5㎝のもの（34・35・56・75・76）と、口径20㎝以上、器高3.6㎝のもの（57）がある。いずれも磨滅が著しくヘラ磨きなどの調整があるかどうかは不明である。坏Ⅱ（33・35・52～55・61・73・74）は口径11～16㎝、器高2.5～3.0㎝のものが主を成す。口縁部内外部をヨコナデ、体外部にユビオサエを残すものである。

皿

皿は同様に、平たい底部から内弯して立ち上がり、口縁端部を巻き込むもの（皿Ⅰ）と、口縁端部を巻き込まないもの（皿Ⅱ）に分けられる。皿Ⅰ（40・60）より皿Ⅱ（59）の口径は13.8㎝と小さい。器高はいずれも2.2～2.4㎝を測り、坏より低く押さえられている。

甕

やや丸味をもつ体部から口縁端部が外弯し、端部を舌状に納めるもの（81）と、口縁部が「く」の字形に外反し、端部はつまみあげて段を成すもの（58）がある。（81）は外面に調整を行なわない南河内地方特有のもので、口縁部にナデを施す以外はオサエのみである。（58）は外面にハケ目、内面体部はヘラ削り、口縁部にハケ目を施す。

土釜

（37・82）は水平な鍔をもち、外上方へ外反気味に大きく開いた口縁部を持つ。口縁部外面はヨコナデ、内面はヨコ方向のハケ目を施す。胎土がやや粗く、にぶい橙色を示す生駒西麓産のものである。

〈製塩土器〉　全体で60片の製塩土器が出土した。大半が小片であるため、形態は不明であるが、口縁端部に丸味をもたせ肥厚するもの（62・63・77・79）と、口縁端部をつまみ出すもの（7，8）端部を自然に納めるもの（41）などがある。いずれも磨滅が著しく調整は不明であるが、胎土はたいへん粗い。

中世・近世

包含層及び遺構面から土師質小皿、瓦器椀片、羽釜片、陶器片など小量であるが中・近世の遺物がみられた。

（48）は平坦気味の底部から外上方に口縁部が伸びる土師質小皿。（49）は刷毛目唐津の鉢高台部である。

まとめ

遺物は縄文時代から中・近世のものまで出土しているが、古墳時代後期（陶邑編年でII－4ないしII　5）のものと、奈良時代（平城宮Iないし II）のものが主をしめる。当市内では、この同時期に相当すると思われる調査遺構もいくつか検出されている。

4．まとめ

調査の結果、各時期の遺構は以下の通りである。

① 江戸時代　暗渠の溝と考えられる溝4・5・6が検出された。

② 中　　世―瓦器片を出土する溝1・2が検出された。この溝は当遺跡の位置する河岸段丘面の地割りと整合する。

③ 奈良時代―掘立柱建物1、井戸、土坑1その他ピットが若干検出された。

④ 古墳時代後期―竪穴住居1・2、溝3、土坑2若干のピットそして遺物は出土していないが埋土から掘立柱建物2・3もこの時期と考えられる。また、溝3は竪穴住居の方向と一致し、溝より東側にはこの時期の遺構は確認されておらず集落を両する溝の可能性がたかい。

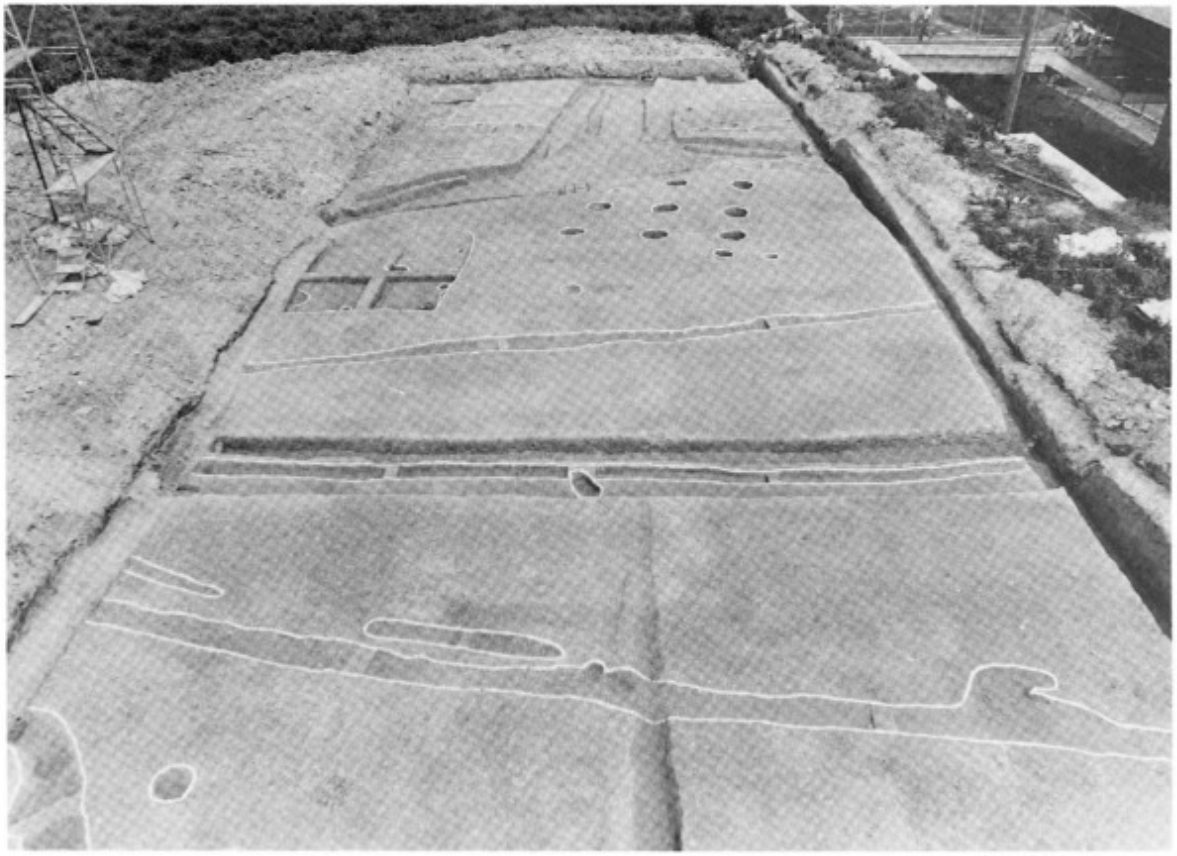
また、遺物では縄文後期頃の粗製鉢の破片が出土し、接近してこの時期の遺構が存在するものと予想される。

今回の調査は烏帽子形城に関連する中世の遺構が検出されるものと予想されたが、調査の結果は以上のように奈良時代及び古墳時代後期の遺構かが中心であった。古墳時代のこの時期の遺跡としては天見川に沿った上流で、三日市遺跡や加塩遺跡、小塩遺跡が所在し、この流域の集落分布は明らかになってきた。

また、奈良時代の遺構を検出した遺跡としては他に高向遺跡・小塩遺跡・本多藩陣屋敷跡などがある。不明であったこの時期の遺跡分布も明らかになってきた。上記の結果、現在考えられている中世の烏帽子形城の関連遺構については、当該調査地までは広がっておらず、かわってそれ以前の時期の遺構が天見川の河岸段丘端に広がることが確認された。

図　　版

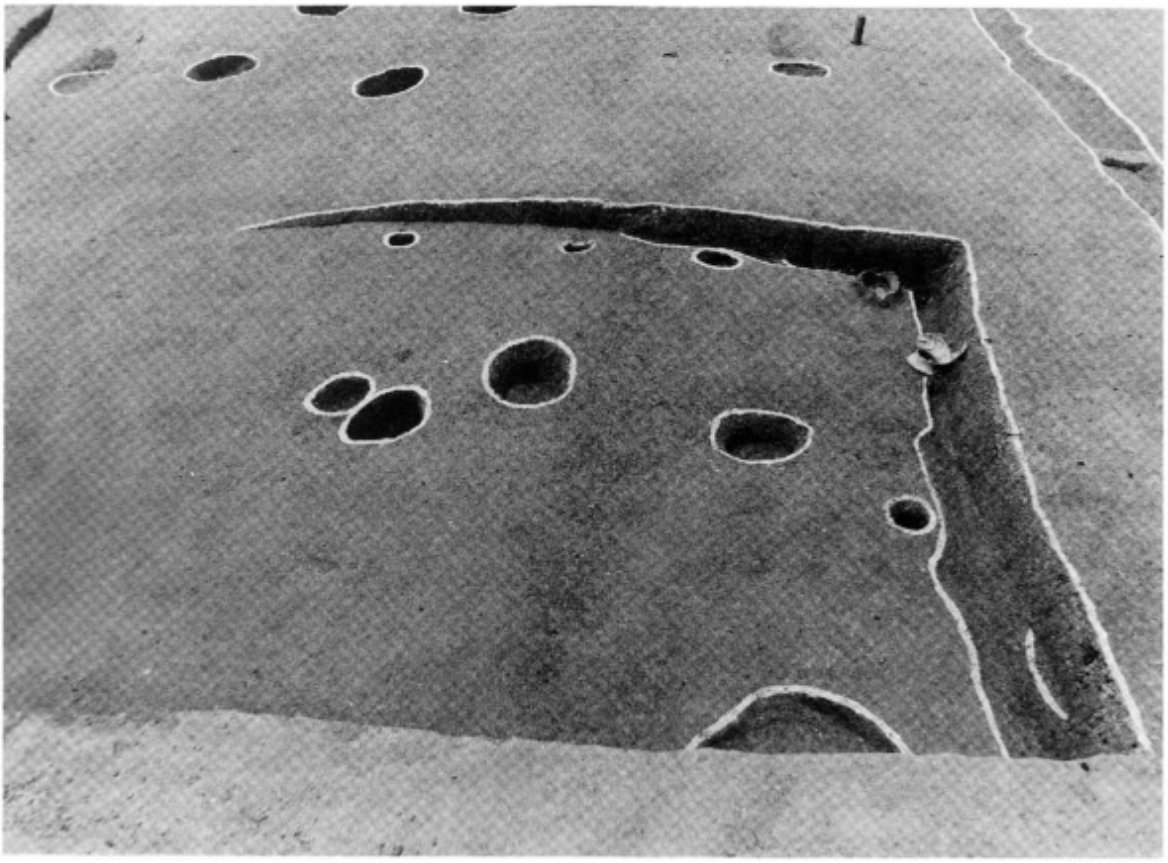
図版1　小塩遺跡（OSO89－1）遺構



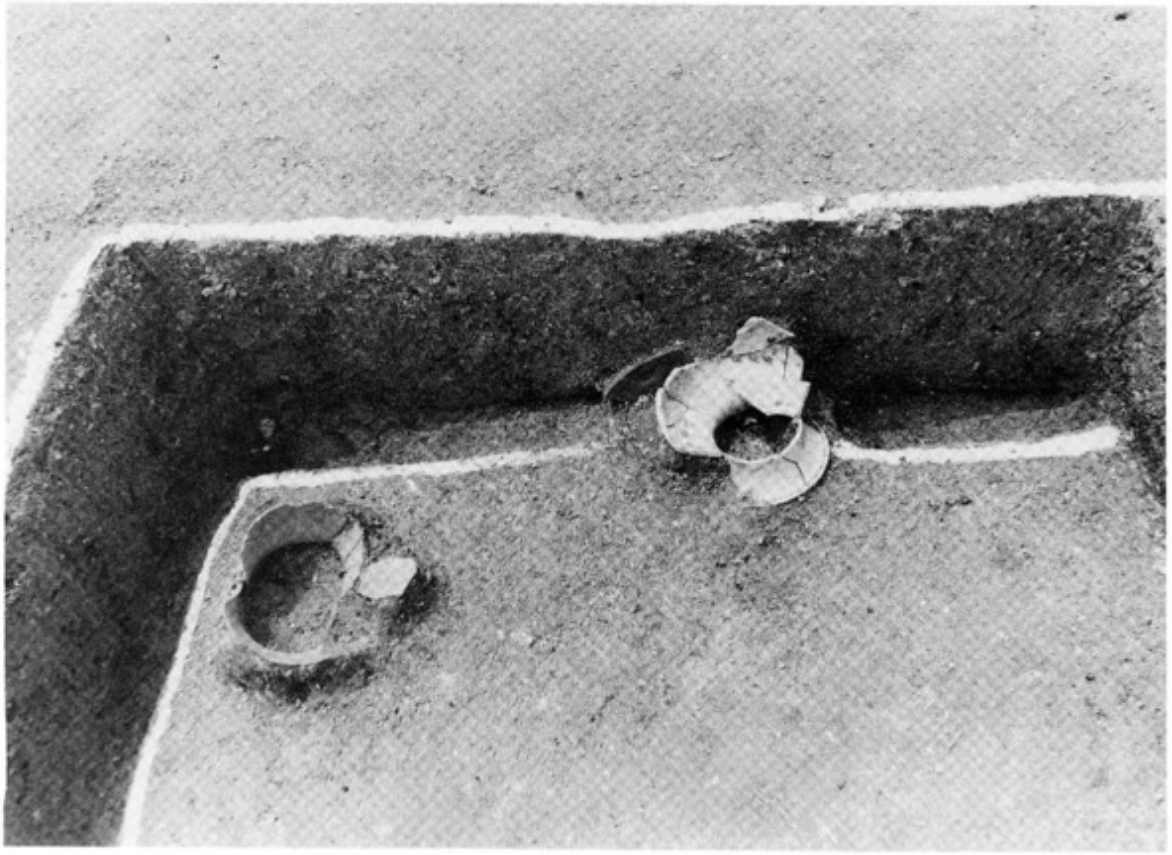
遺跡全景（西から）

遺跡全景（東から）

図版2　小塩遺跡（OSO89－1）遺構

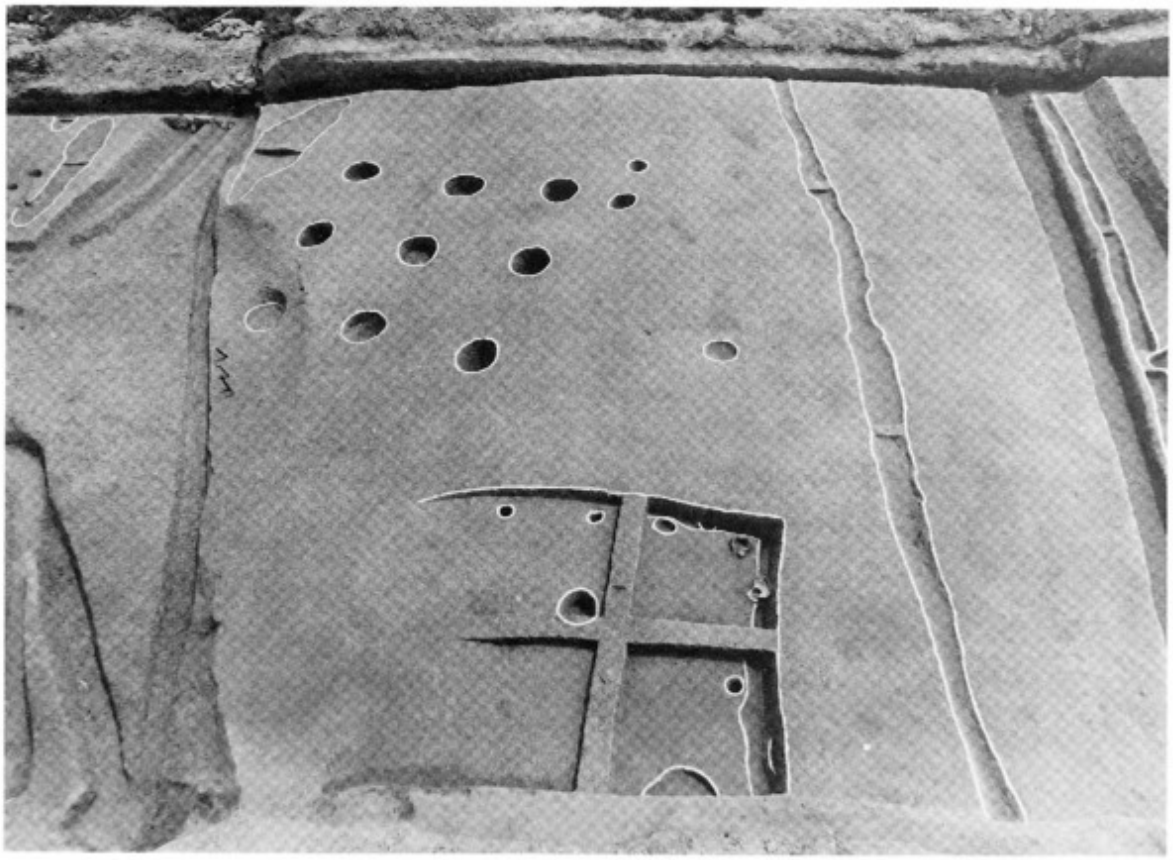


竪穴住居

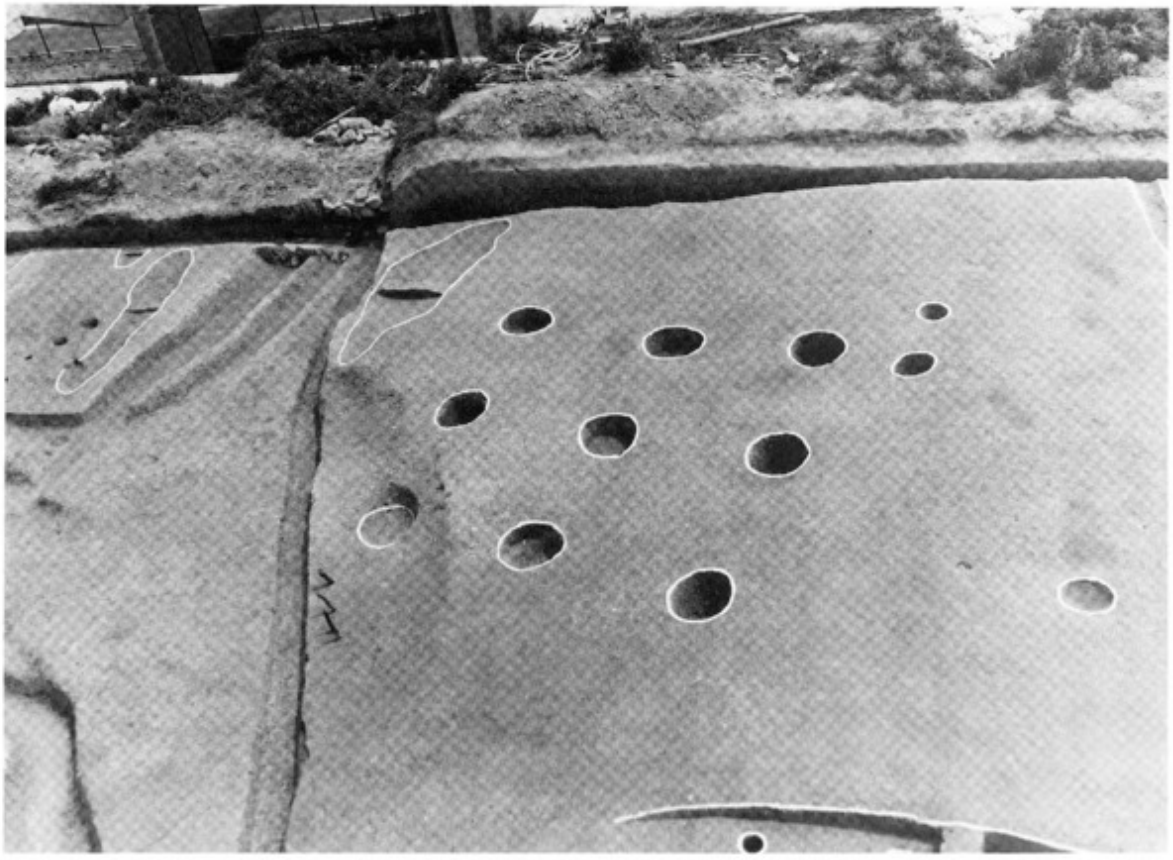


竪穴住居　土器出土状況

図版3　小塩遺跡（OSO89－1）遺構

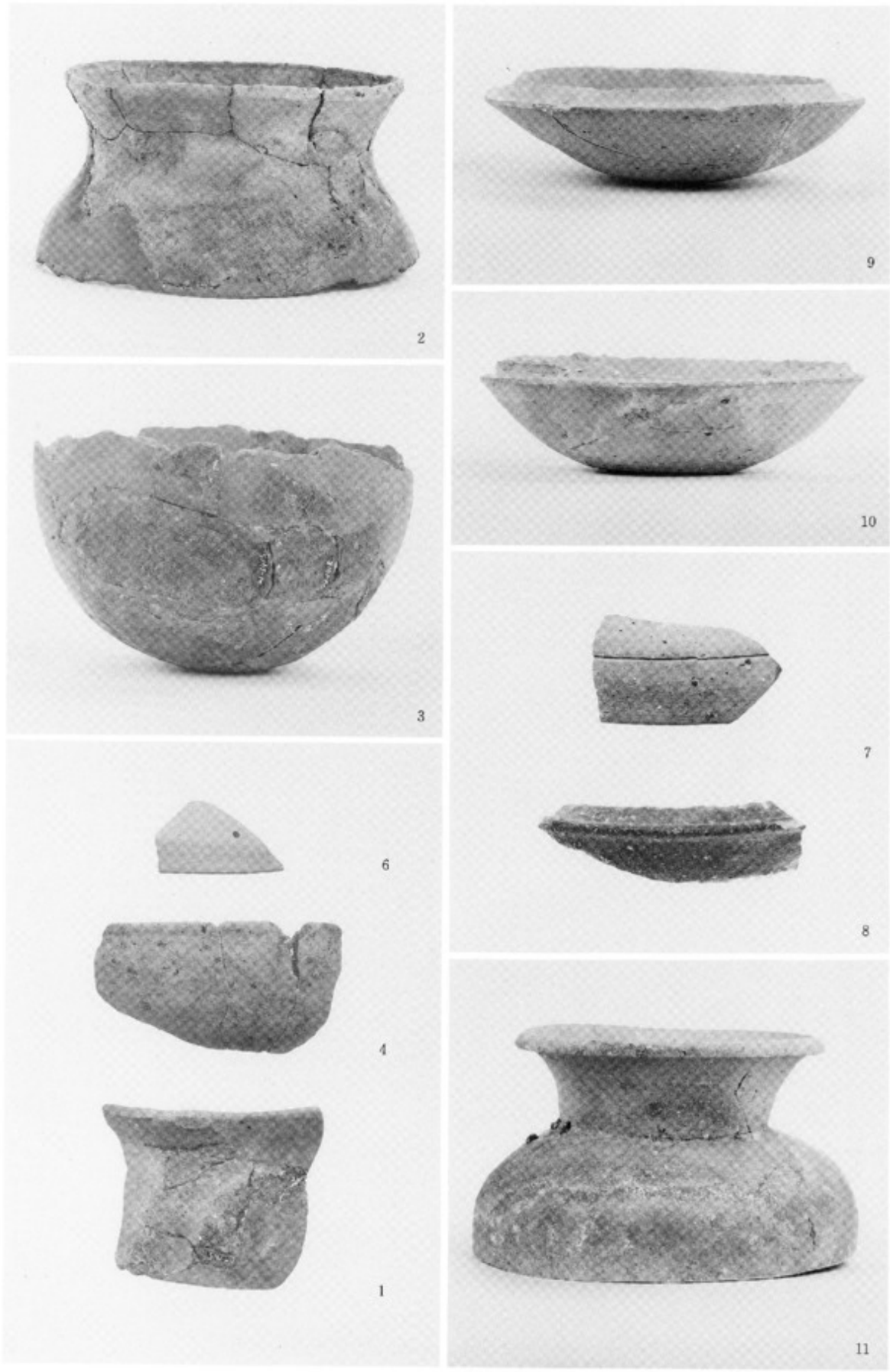


竪穴住居、掘立柱建物



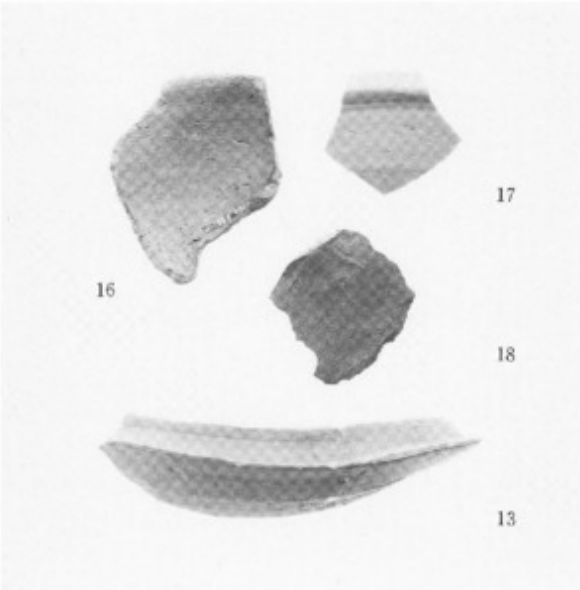
掘立柱建物

図版4　小塩遺跡（OSO89－1）遺物



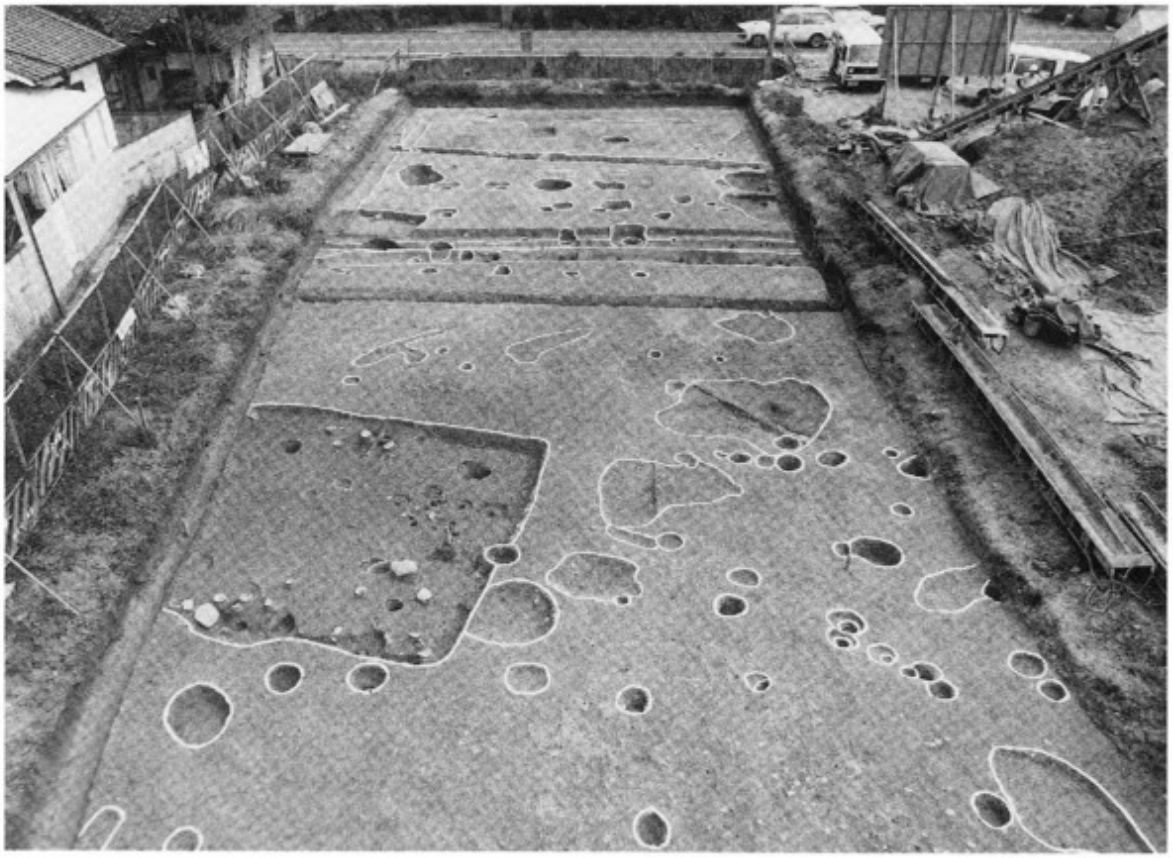
溝1（1・3・4・6・9・10）、溝2（7）、竪穴住居（2・11）、土器出土ピット（8）

図版5　小塩遺跡（OSO89－1）遺物

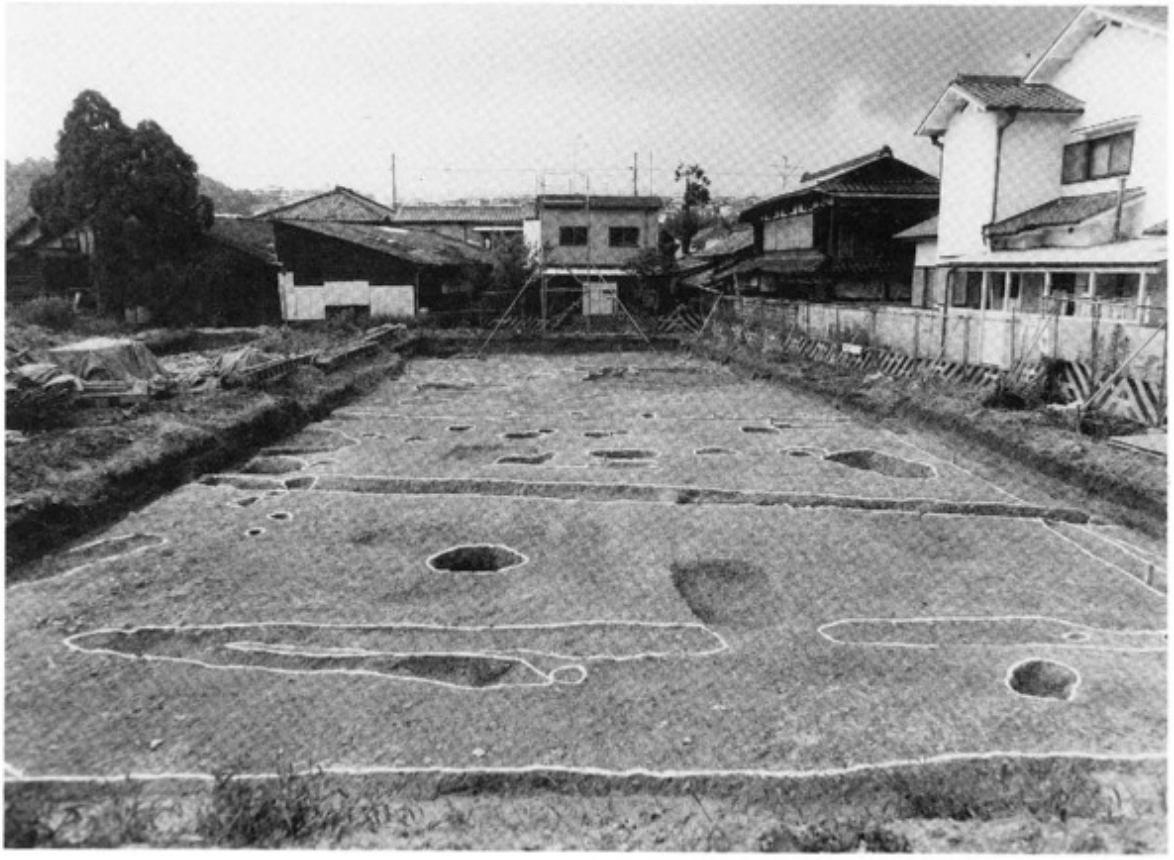


包含層（12～18）

図版6　烏帽子形城（EBS89－1）遺構

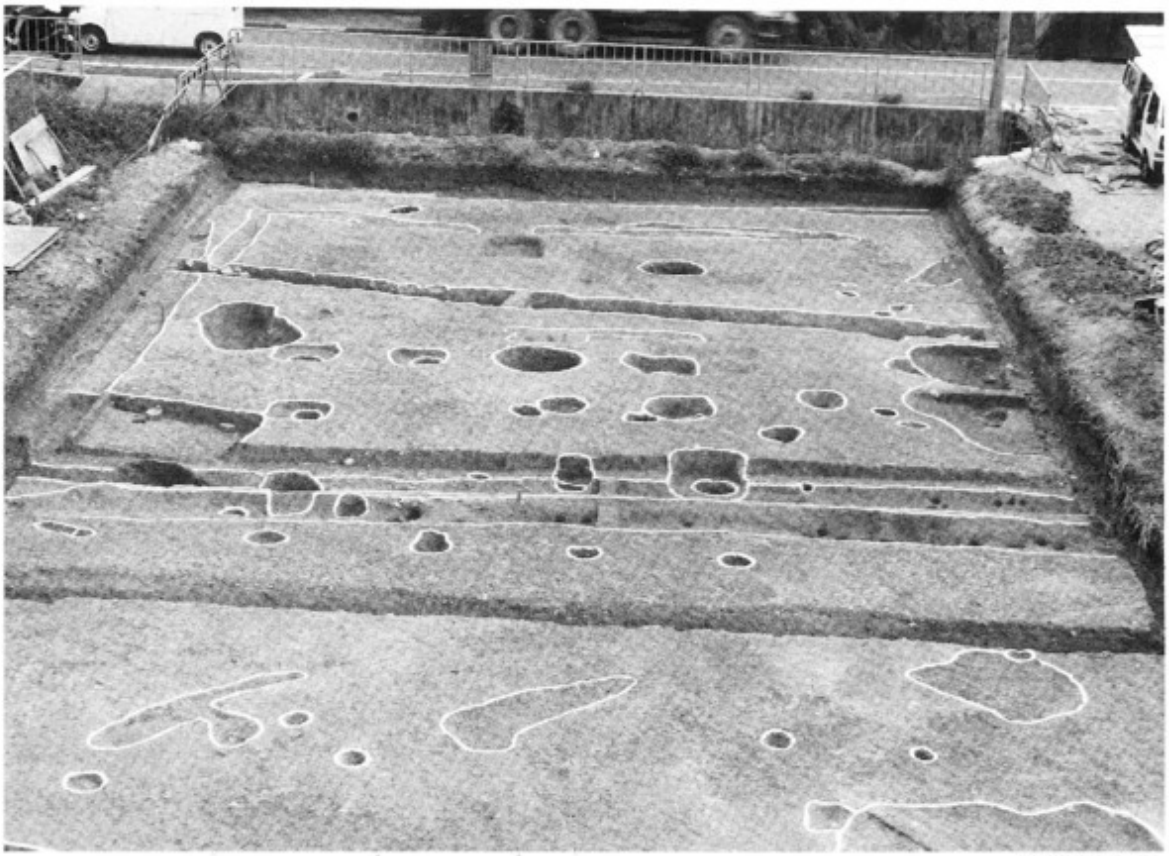


遺跡全景（東から）



遺跡全景（西から）

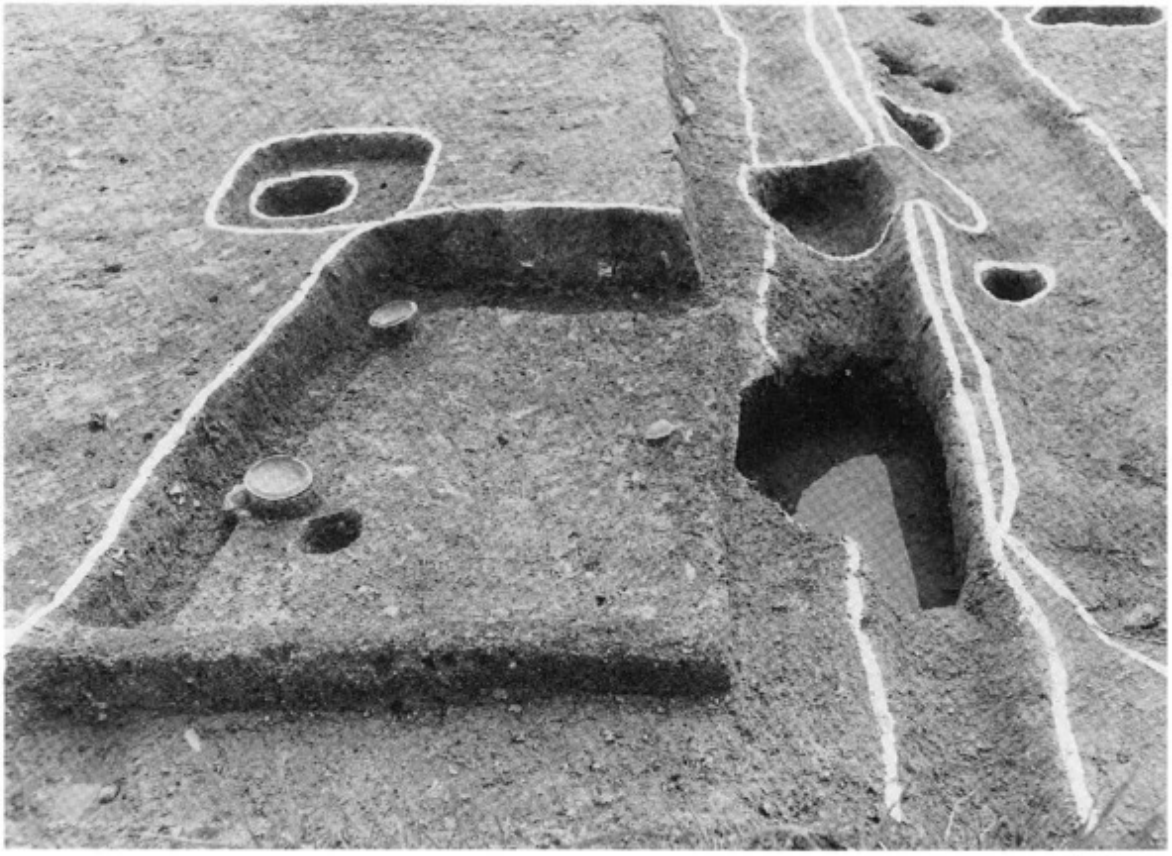
図版7　烏帽子形城（EBS89－1）遺構



掘立柱建物1

掘立柱建物3

図版8　烏帽子形城（EBS89－1）遺構

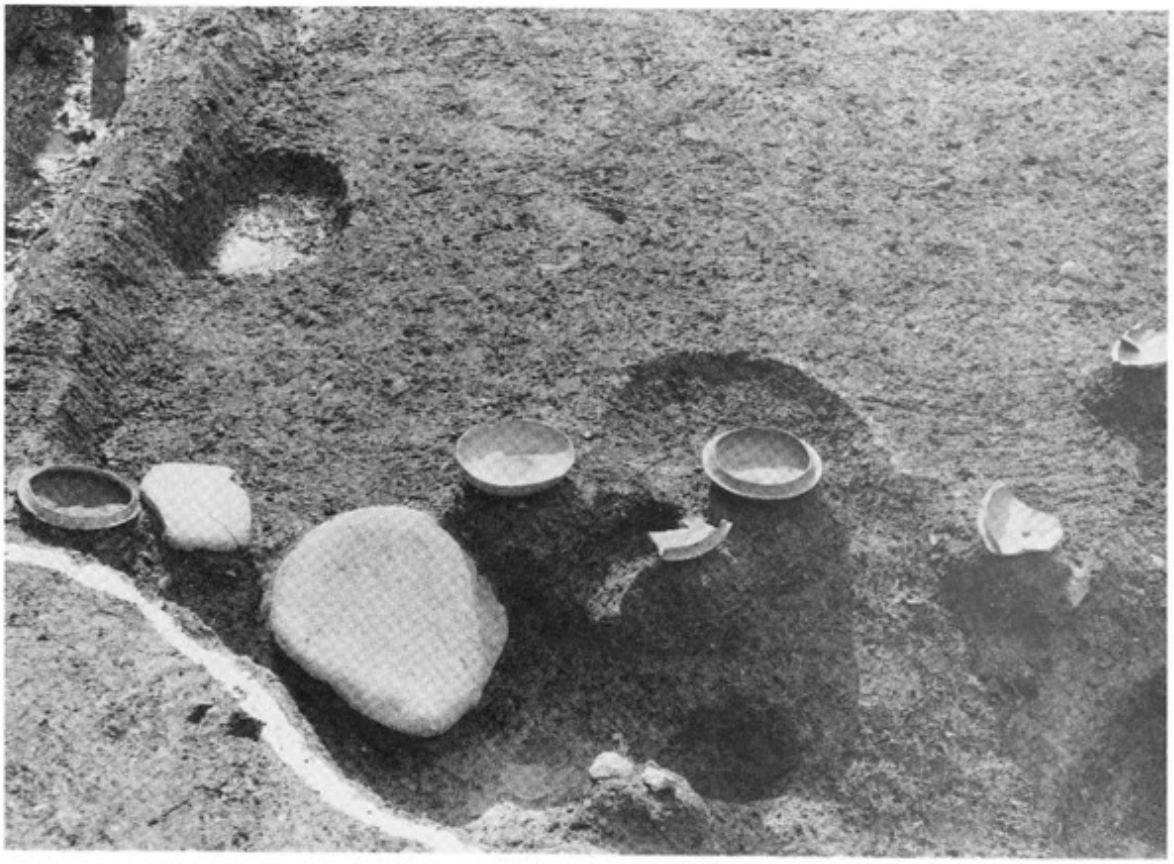


竪穴住居1

竪穴住居1　土器出土状況

図版9　烏帽子形城（EBS89－1）遺構

竪穴住居2



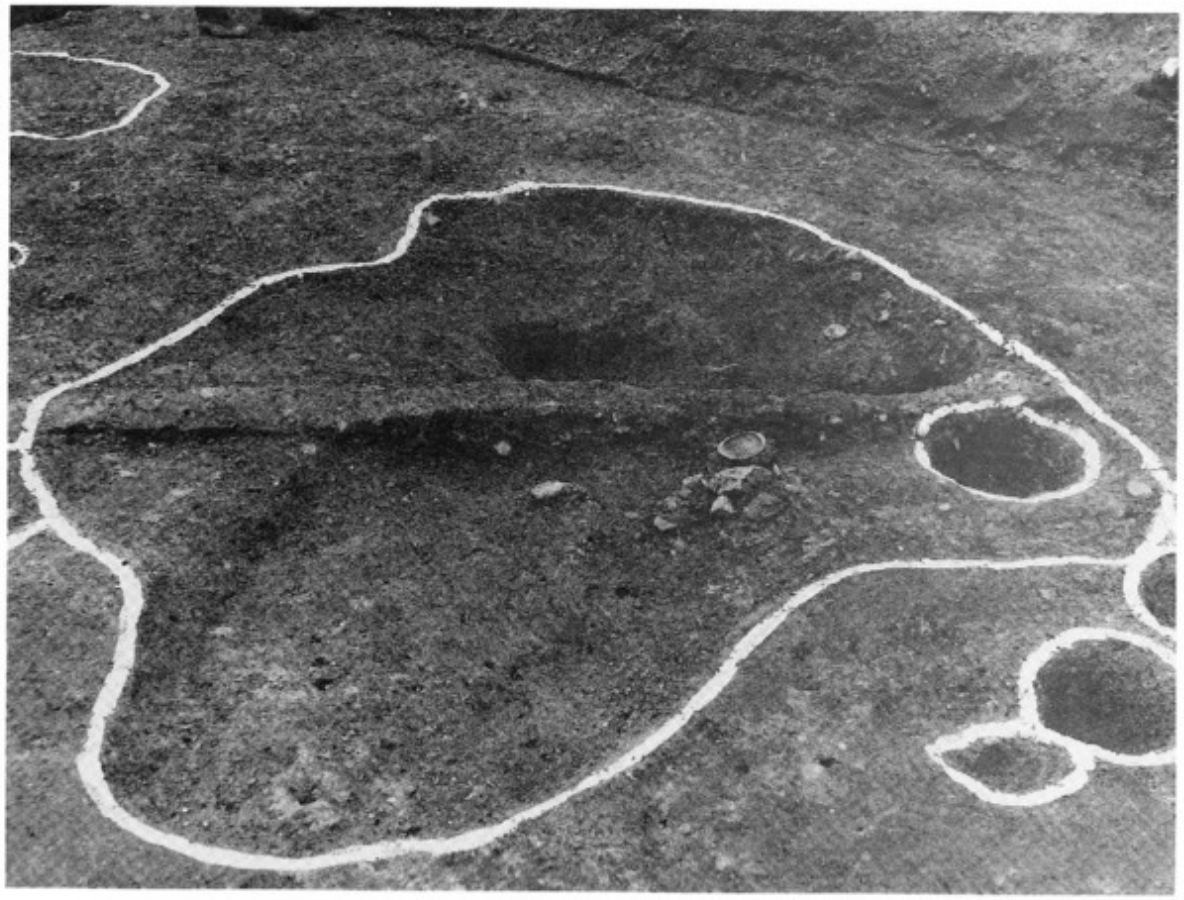
竪穴住居2　土器出土状況

図版10　烏帽子形城（EBS89－1）遺構

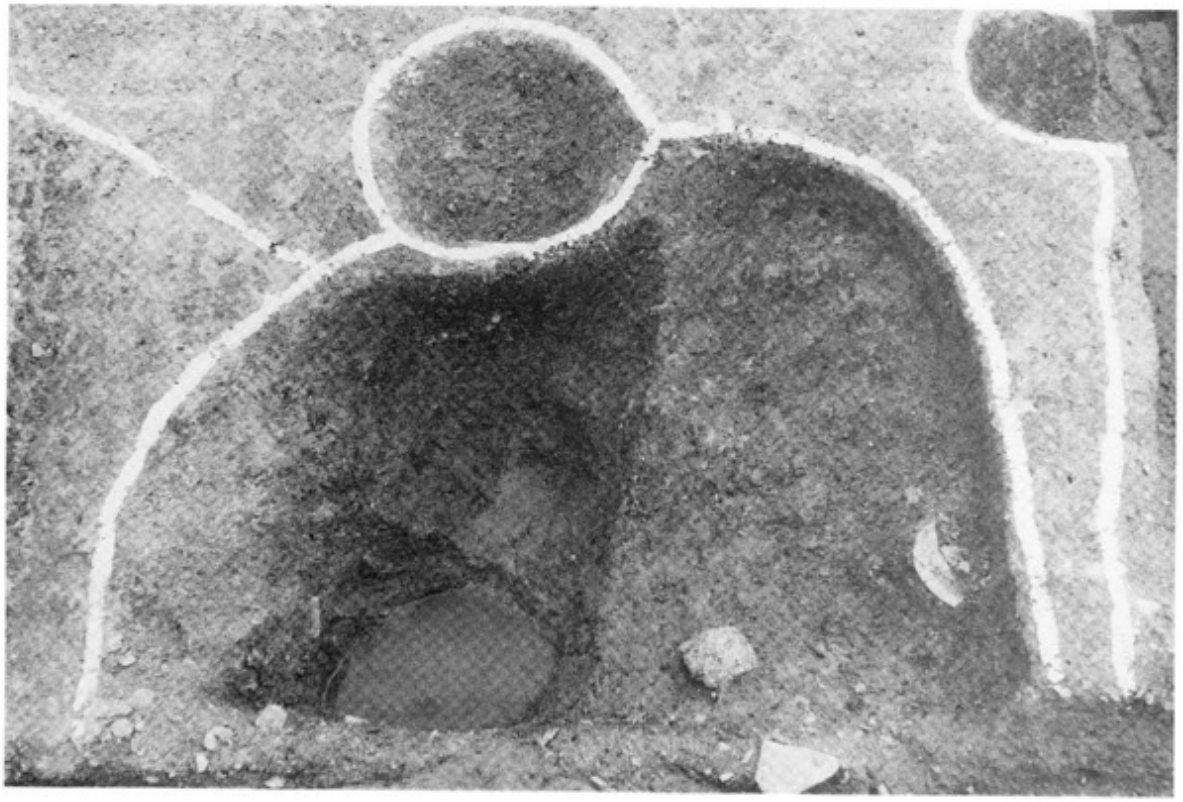
竪穴住居2　土器出土状況

竪穴住居2　竈状遺構

図版11　烏帽子形城（EBS89－1）遺構



土坑2



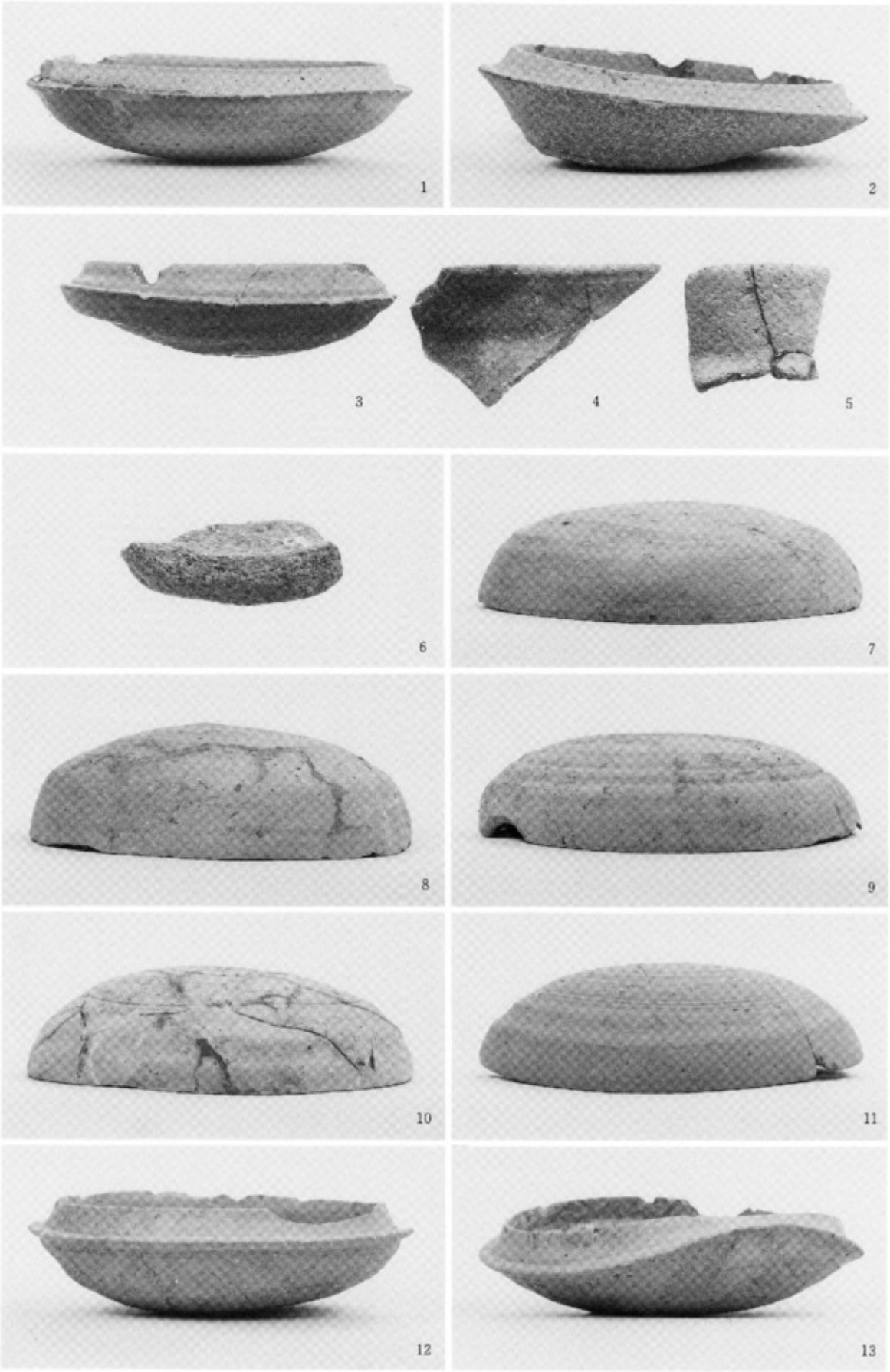
井戸

図版12　烏帽子形城（EBS89－1）遺構

溝3

溝3　土器出土状況

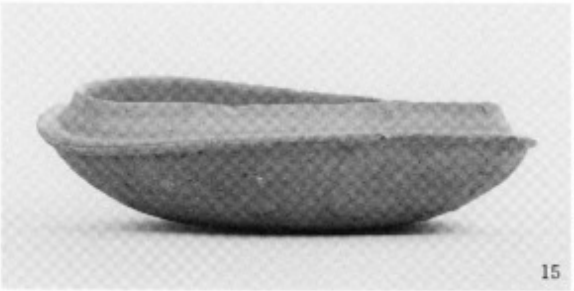
図版13　烏帽子形城（EBS89－1）遺物

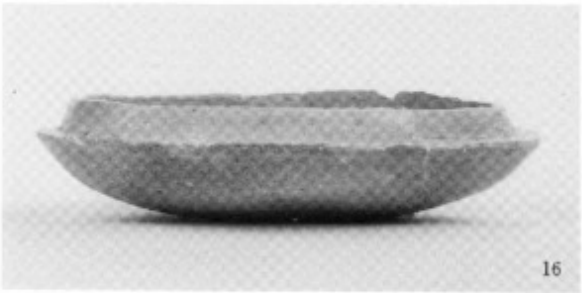


竪穴住居1（1～5）、竪穴住居2埋土（6）、竪穴住居2（7～13）

図版14　烏帽子形城（EBS89－1）遺物

14


15


16

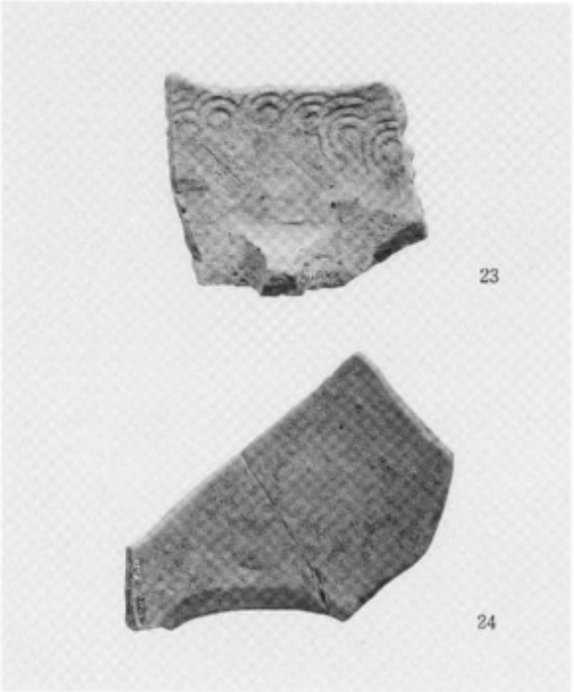
17

18

20

21

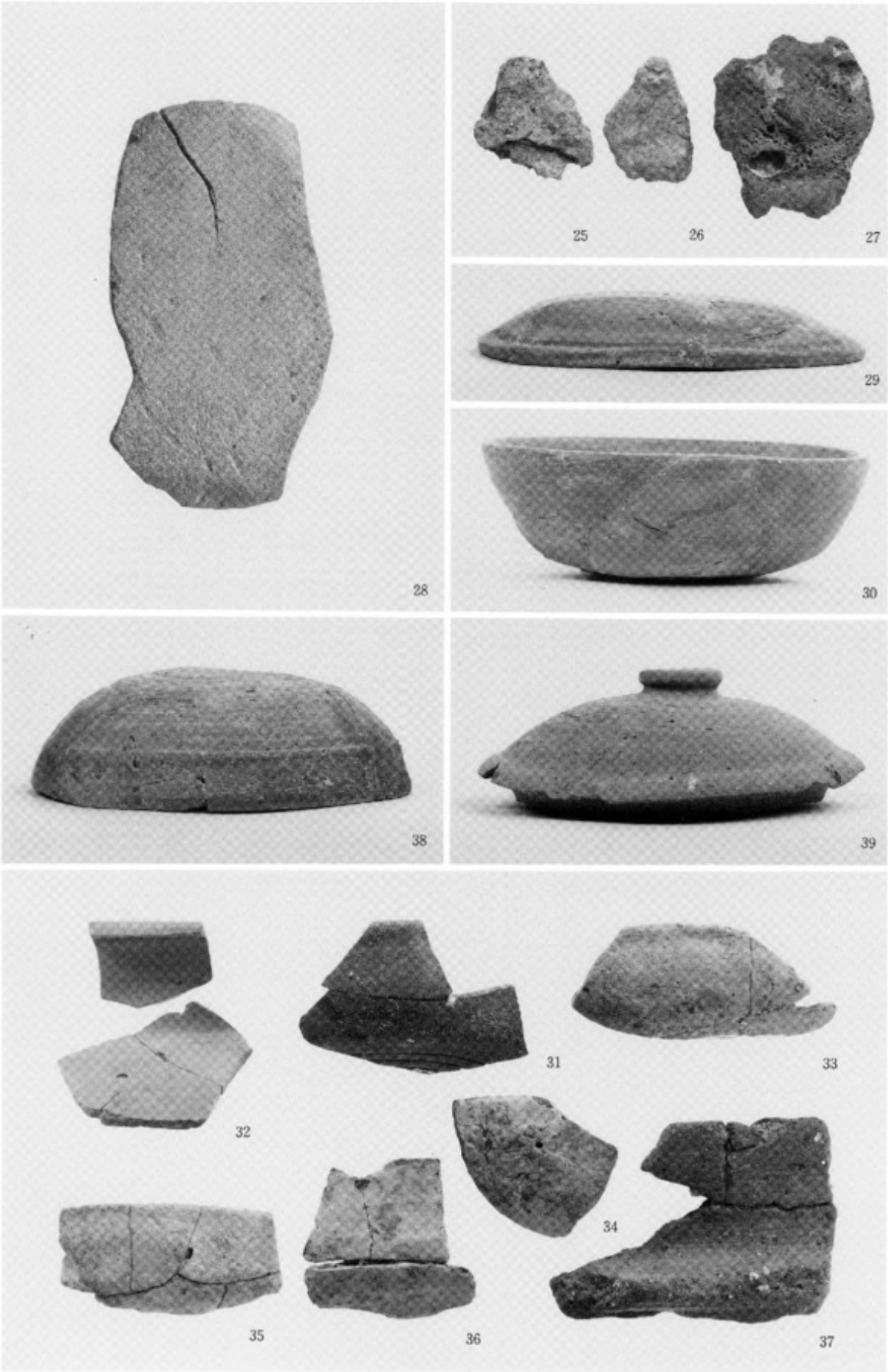
22


23

24

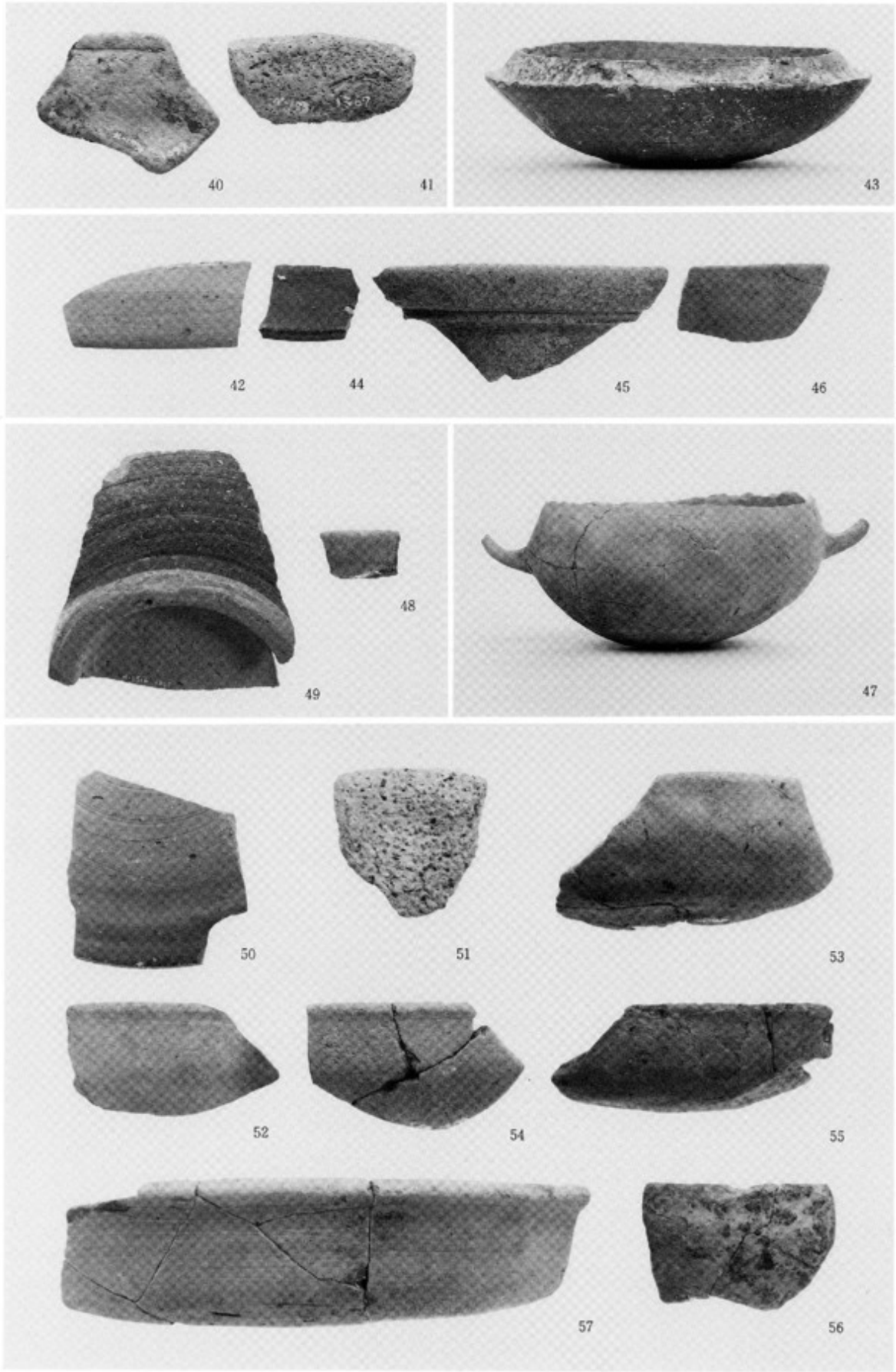
竪穴住居２（14～24）

図版15　烏帽子形城（EBS89－1）遺物



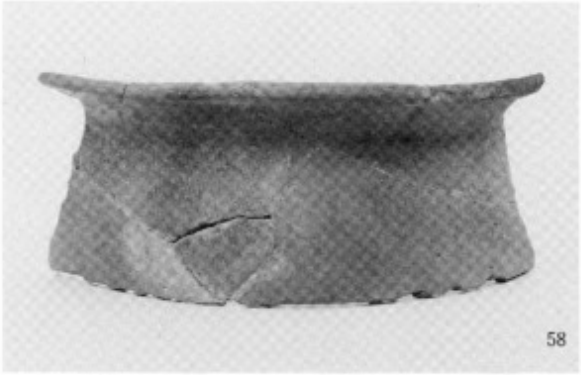
竪穴住居２（25～28）、土坑１（29～37）、土坑２（38～39）

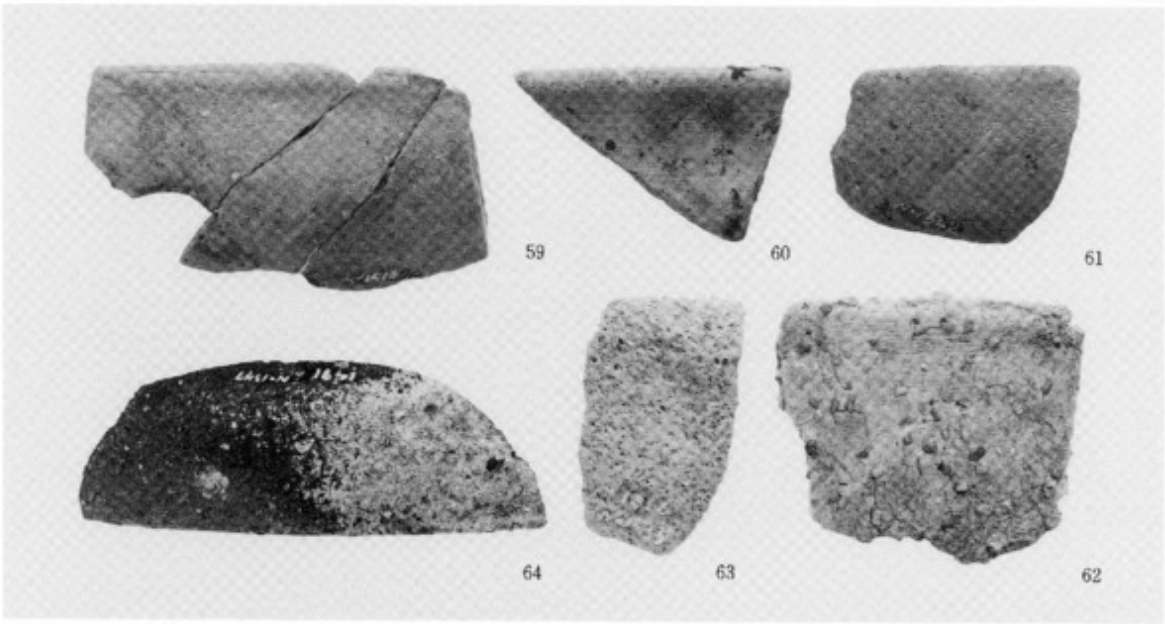
図版16　烏帽子形城（EBS89－1）遺物

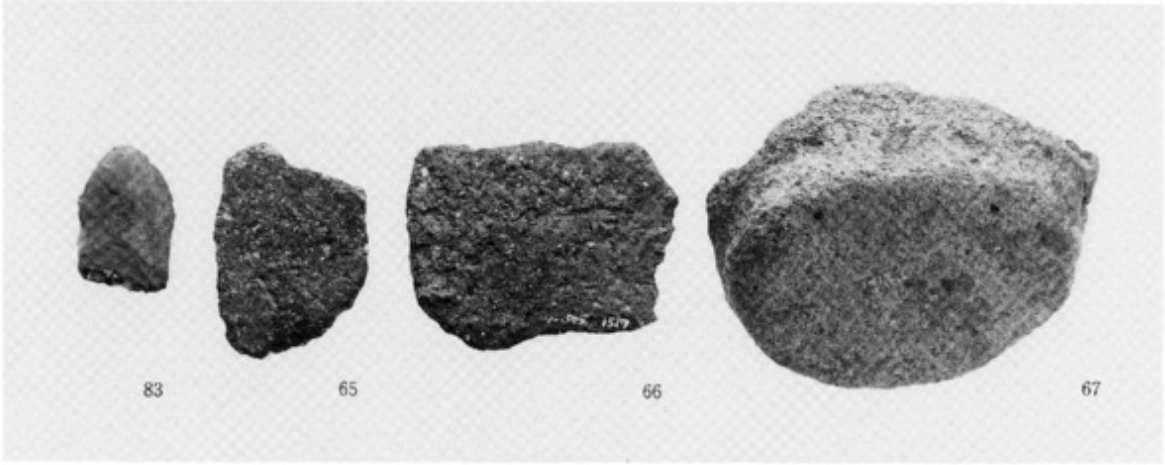


土坑3（40・41）、溝3（42～47）、溝5（48・49）、井戸（50～57）

図版17　烏帽子形城（EBS89－1）遺物

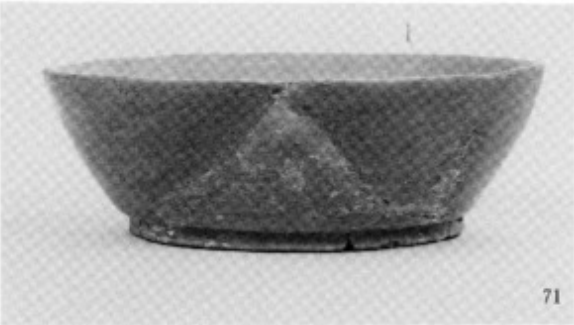


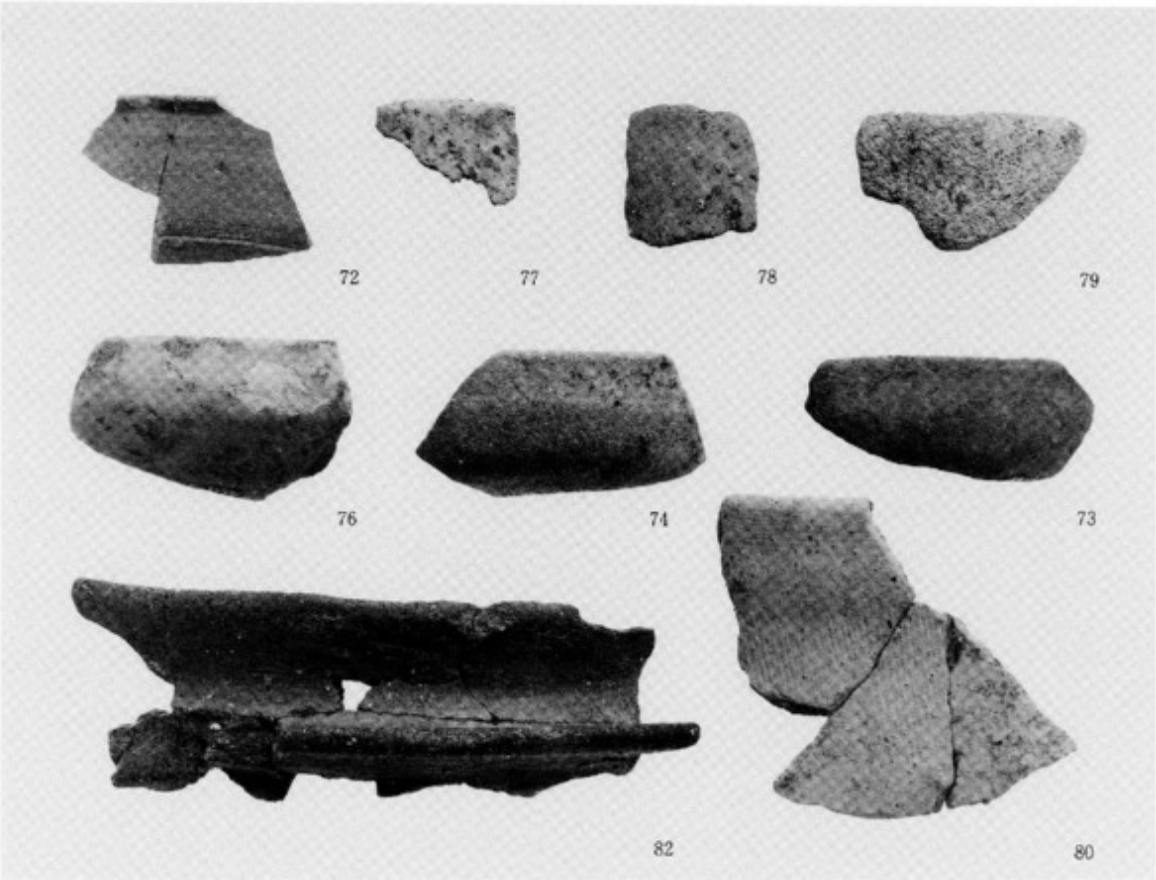




井戸（58）、ピット（59～64）、包含層（65～70・83）

図版18　烏帽子形城（EBS89－1）遺物





包含層（71～82）

河内長野市遺跡調査会報II

1990年3月

発行　河内長野市遺跡調査会
　　河内長野市原町396－3
印刷　㈱ 中島弘文堂印刷所